青年招へい事業

アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国、サウディ・アラビア

［交流レポート］

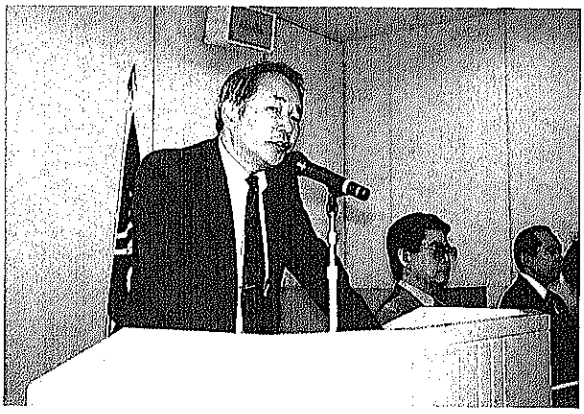
JICA LIBRARY
1188637 [1]

2001

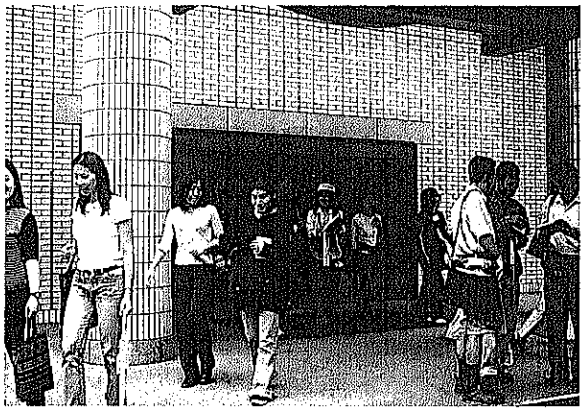
国際協力事業団

国内研
J R

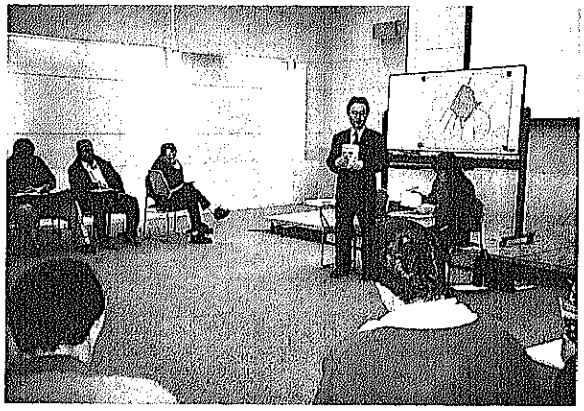
開講式

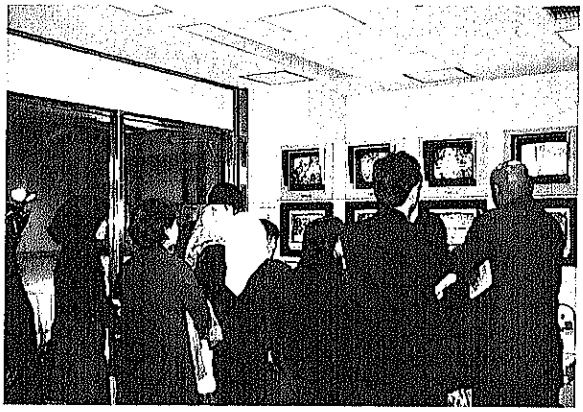


共通プログラム

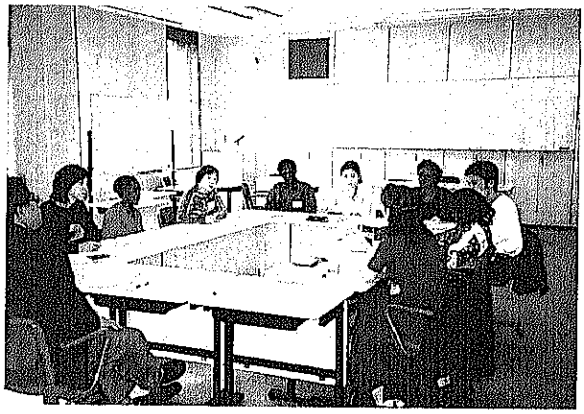


分野別都内プログラム



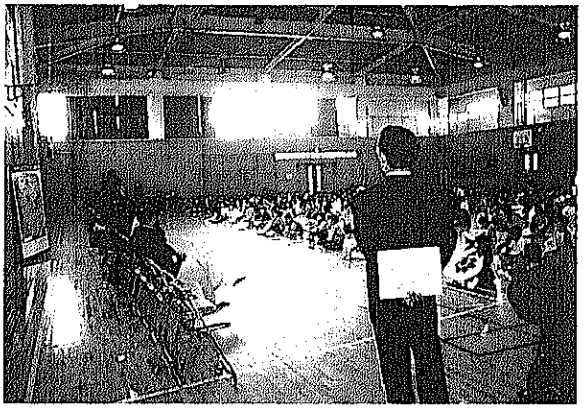


合宿セミナー



1188637 [1]

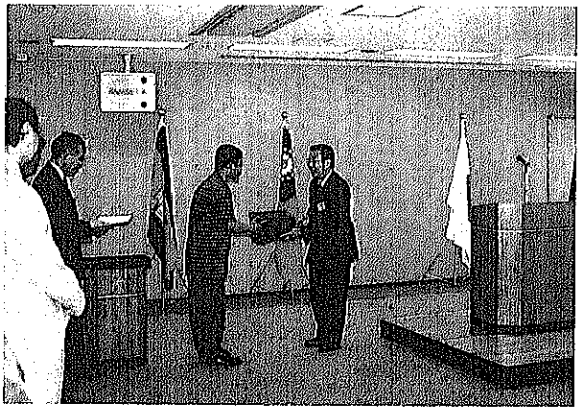
分野別地方プログラム



ホームステイ

見学旅行

閉講式・歓送会



青年招へい事業

はじめに

「青年招へい事業」は、国際協力事業団（JICA）が開発途上国を対象に実施する技術協力の一環として、将来の国造りを担う青年を、専門分野別に約１カ月間招へいし、それぞれの専門分野について学ぶとともに、ホームステイ受入家族などとの幅広い交流を通じて相互理解を深め、信頼と友情を築くことを目的としています。

招へい国は当初アセアン６カ国のみでしたが、現在は123カ国・地域以上にまで拡大し、昭和59年度に事業を開始して以来、18年間で日本を訪問した青年は23,256名に達しました。これはひとえに、関係各方面の皆様のご協力と温かいご支援によるものと、心からお礼申し上げます。

本報告書は、招へい青年、合宿セミナーに参加した日本青年およびホームステイを引き受けていただいた全国の家庭の皆様から寄せられた感想文を中心に、招へい青年の滞在記録をとりまとめたものです。本報告書が本事業のさらなる発展の指針となり、また皆様の良き思い出の一助となれば幸いです。なお、本報告書は今年度の全招へい青年および各国の関係者にも送付させていただく予定です。

最後となりましたが、心温まるご感想、ご意見をお寄せいただいた皆様ならびに関係者の方々に重ねてお礼申し上げますとともに、「青年招へい事業」がさらに有意義なプログラムとなりますよう、今後ともご支援、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

平成14年３月

国際協力事業団
国 内 事 業 部
部長　今津　武

目　次

はじめに

1．青年招へい事業―アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国、サウディ・アラビア―

(1)　事業の目的……7

(2)　招へい事業……7

(3)　プログラム概要……9

(4)　アフターケア事業……10

2．招へい青年の印象

アジア

カンボディア……11
インドネシア……12
ラオス……15
マレイシア……16
ミャンマー……19
フィリピン……19
タイ……23
ヴィエトナム……25
東ティモール……28
バングラデシュ……28
インド……29
モルディヴ……30
ネパール……30
パキスタン……31
スリ・ランカ……32
モンゴル……32
アルメニア……33
アゼルバイジャン……34
キルギス……34

太平洋諸国・地域

パプア・ニューギニア……35
マーシャル諸島……36
ミクロネシア……37
パラオ……37

アフリカ

ベナン……38
ナミビア……39
セイシェル……39
トーゴー……40
テュニジア……40
ウガンダ……41

中南米

エクアドル……41
グレナダ……42

サウディ・アラビア

サウディ・アラビア……42

3．合宿セミナー参加日本青年の声……43

4．ホストファミリーの思い出……51

5．実施協力団体の所感……59

1. 青年招へい事業

アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国、サウディ・アラビア

(1) 事業の目的

青年招へい事業は国際協力事業団（JICA）が開発途上国を対象に実施する技術協力の一環として、これら諸国の未来の国造りを担う青年を専門分野別に28日間わが国に招へいし、それぞれの分野について学ぶとともに、これらの参加青年が日本の同世代の青年との交流を通じ相互理解を深め真の友情と信頼を培うことを目的とする。

(2) 招へい事業

(1) 招へい人数

合計1,749名

ASEAN９カ国・地域より817名（インドネシア147名、マレイシア156名、フィリピン149名、タイ150名、ヴィエトナム100名、ラオス30名、カンボディア40名、ミャンマー30名、東ティモール15名）、パプア・ニューギニア、フィジーをはじめとする太平洋14カ国・地域より88名、中国より318名、韓国より97名、インド、パキスタンをはじめとする南西アジア７カ国より143名、モンゴルより10名、アフリカ諸国41カ国より130名、中南米諸国29カ国より47名、サウディ・アラビアより17名、中央アジア５カ国より53名、コーカサス３カ国より28名。

(2) 招へい対象者

以下の分野の指導的立場にある18～35歳の青年。

(ア) 経済、中小企業経営

経済官庁公務員、金融・貿易関係民間実務者、中小企業従事民間実務者、等

(インドネシア、マレイシア、フィリピン、タイ、ヴィエトナム、ASEAN混成、太平洋諸国、中央アジア諸国、コーカサス諸国)

(イ) 教育、教員、理数科教員、女性教員、小中学校教員、教育行政

教員、教育行政公務員、文化・スポーツ関係者、等

(インドネシア、マレイシア、ミャンマー、フィリピン、タイ、ヴィエトナム、ASEAN混成、ブータン、インド、モルディヴ、ネパール、スリ・ランカ、アフリカ諸国、中南米諸国)

(ウ) 青年指導者、行政、地方行政官、公務員

国家公務員、地方公務員、政府機関職員、等

(カンボディア、インドネシア、マレイシア、フィリピン、タイ、ヴィエトナム、モンゴル、東ティモール)

(エ) 農業、林業

農林水産業関係公務員、農林水産業従事実務者、等

(カンボディア、インドネシア、マレイシア、フィリピン、タイ、ヴィエトナム)

(オ)　科学技術

科学技術関係公務員、科学技術研究者、等

(ASEAN混成)

(カ)　公共・公益事業

通信関係公務員、通信従事実務者、等

(ASEAN混成)

(キ)　環境保全

環境保全行政関係公務員、環境保全団体指導者、等

(ASEAN混成、太平洋諸国)

(ク)　地域振興、地域開発、社会開発

開発行政関係公務員、地域振興従事民間実務者、等

(インドネシア、マレイシア、タイ、太平洋諸国、パプア・ニューギニア)

(ケ)　医療、保健衛生

医師・看護婦等医療従事者、公衆衛生関係公務員、民間実務者、等

(ASEAN混成、アフリカ諸国)

(コ)　社会福祉

社会福祉関係公務員・現場職員、社会奉仕関係者、社会保障・労働関係公務員、等

(ASEAN混成、中南米諸国)

(サ)　マスメディア

国家公務員、新聞記者、等

(サウディ・アラビア)

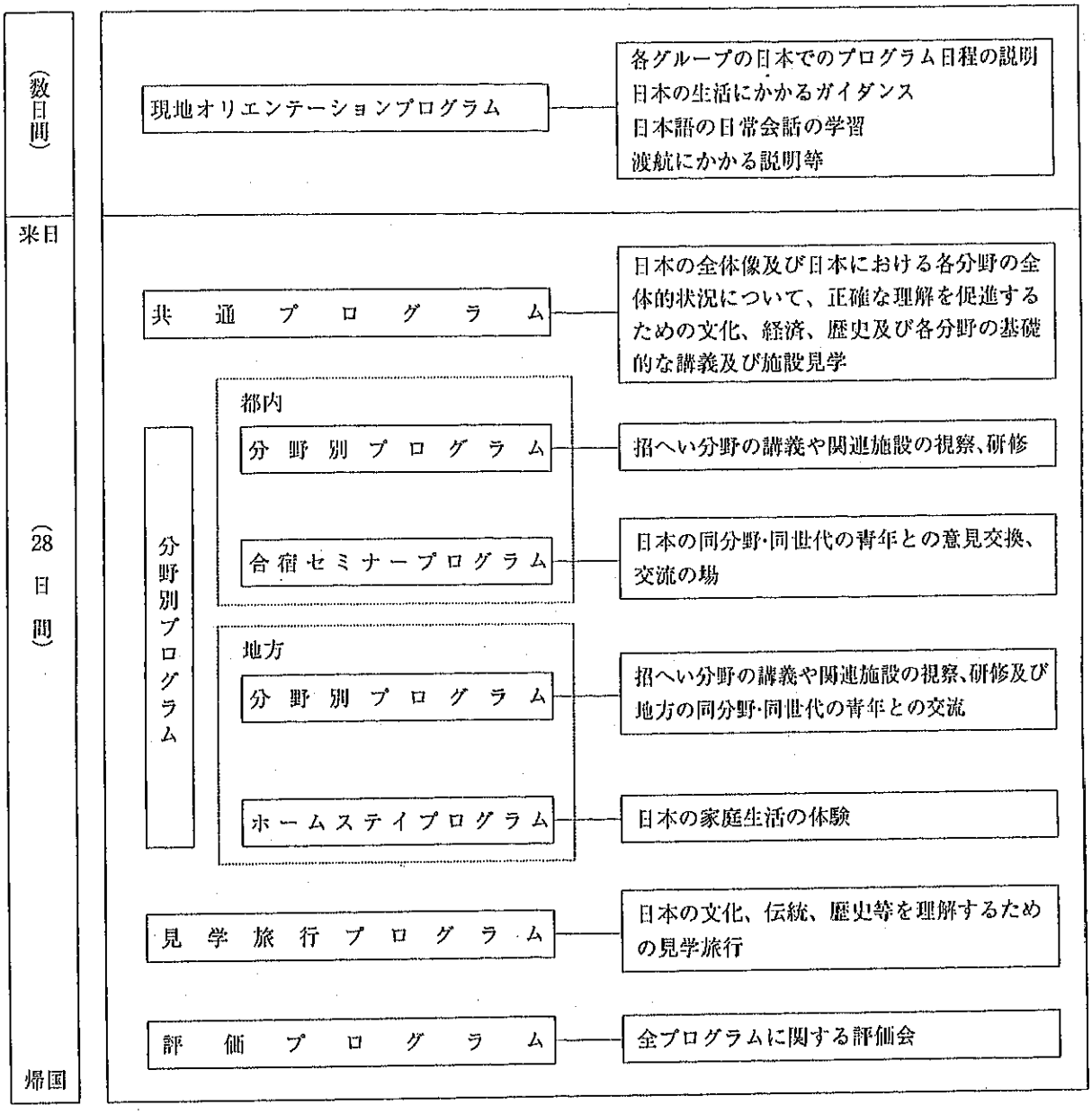
(3)　招へい期間

原則28日間（中国　教育部については21日間）。来日前、数日間の現地オリエンテーションプログラムを実施（実施しないグループもある）。

(4)　受け入れ時期

2001年５月から2002年４月

(3) プログラム概要


(数日間)
現地オリエンテーションプログラム
各グループの日本でのプログラム日程の説明
日本の生活にかかるガイダンス
日本語の日常会話の学習
渡航にかかる説明等
来日
(28日間)
帰国
共通プログラム
日本の全体像及び日本における各分野の全体的状況について、正確な理解を促進するための文化、経済、歴史及び各分野の基礎的な講義及び施設見学
分野別プログラム
都内
分野別プログラム
招へい分野の講義や関連施設の視察、研修
合宿セミナープログラム
日本の同分野・同世代の青年との意見交換、交流の場
地方
分野別プログラム
招へい分野の講義や関連施設の視察、研修及び地方の同分野・同世代の青年との交流
ホームステイプログラム
日本の家庭生活の体験
見学旅行プログラム
日本の文化、伝統、歴史等を理解するための見学旅行
評価プログラム
全プログラムに関する評価会

(4) アフターケア事業

「青年招へい事業」により日本に招へいした青年が、帰国後も対日理解を増進し、日本の同世代の青年たちとの友情を持続させるよう、青年の帰国後、以下のアフターケア事業を実施している。

(1) 文献供与

帰国青年に対し、日本でのプログラム内容をとりまとめた「交流レポート」やJICA海外向け広報誌「JICA Network」などの送付を行い、帰国後も対日理解が持続されるよう、情報提供を実施している。

(2) 各国同窓会の設立

各国の帰国青年によって構成される同窓会設立を促進し、新規招へい青年の現地プログラムへの協力、帰国青年のための総会及び会報作成等の活動を同窓会が主体的に実施するにあたり、所要経費負担をするなど側面的支援を行っている。ブルネイ、インドネシア、マレイシア、フィリピン、シンガポール、タイ及びカンボディア、ヴィエトナムではすでに同窓会が設立され、ラオスにおいては、準備中あるいはその機運が盛り上がっている。また、それ以外の国々でも、JICAの「技術研修員受入事業」により来日した元研修員と合同で同窓会を組織し、活動している場合が多い。

(3) 同窓会交流連絡会

各同窓会の連係を図ることによって、各国同窓会を充実し、日本の招へい事業の効果を継続的、多角的に発展させるため、各国同窓会が一堂に会して交流連絡会を開催するにあたり、日本側は旅費等の経費面で支援するとともに、日本側代表者を派遣し、各国代表との包括的な意見交換を行っている。なお交流連絡会は、現在のところ、同窓会が設立されているASEAN諸国間で行われており、1988年に第１回連絡会がインドネシアで開催され、その後、毎年持ち回りで実施されている。2000年４月にはわが国において各国代表者を招へいし、2000年シンポジウムが開催された。

(4) アフターケア・チームの派遣

青年の招へいに中心的役割を果たした交流青年、ホストファミリー、関係機関担当者から構成される日本青年団を各国に派遣することによって、帰国青年の日本理解をフォローアップするとともに、受入関係者が各国の実態を把握することによって、より効果的なプログラム策定に役立てる。また、これらアフターケア・チームの派遣により、片側通行であった交流事業を相互に発展・拡充させ、一層の信頼と友情を深める。平成13年度は３チーム派遣した。

2. 招へい青年の印象

■アジア

■カンボディア

日本での研修

ミー・ユーン
(農業(農村開発)グループ)

私たちはカンボディア王国の農林水産省と地方開発省を代表し、この青年招へい事業に参加した。カンボディアでは事前に日本語と日本の社会について講義を受け、来日してからも日本語と日本の社会、戦後の日本の農業に関して講義を受けた。さらには、武道を体験し、全国農業会議所の講義を受け、神奈川県の農業研究所では野菜や果物の改良について研修した。

その後私たちは、広島県庄原市で市長の表敬、庄原市の農協や田川小学校、田園文化センターの見学、野菜と果物の農家や畜産農家の訪問、庄原実業高校では乳搾りを体験した。この中で特に思い出深かったのは、３日間のホームステイだった。

広島では平和記念資料館を訪れ、京都では金閣寺や銀閣寺などの伝統的な建造物を見学した。

このプログラム中、様々な機会を通じたカンボディア青年と日本青年との交流は、大変実りのあるものだった。また、それぞれの研修施設で得た知識と経験は、大変貴重で有意義なものだった。これらの思い出を、私たちは決して忘れないだろう。

このような大変貴重な研修を行う機会を与えてくださった日本政府と関係団体に、深くお礼を申し上げる。この研修の成果はカンボディアに帰ってから、皆に伝えたいと思う。

青年招へい事業の感想

ソパン・スー
(公務員グループ)

青年招へい事業は日本と世界の国々が友好を築く目的で作られた。全分野において、進歩した日本の科学技術と日本人の優しさを、紹介する場でもある。このプログラムに参加した私たちの目的は達成され、日本の青年をはじめ一般の方々との友好関係を結ぶことができ、忘れられない思い出も多くできた。

合宿セミナーの分科会、科学と文化に関係する施設、日本人との交流会、そしてホームステイは、私たちに体験と知識を与えてくれた。これらはカンボディアの都会と地方の開発に役に立つと思う。また日本人の文化と習慣が分かるようになった。特にホストファミリーの待遇がとても良く、感動した。このような日本人の優しさを私たちは思い出として忘れないだろう。

注目すべき点がもう一つある。地方に住んでいる人々の生活も都会と変わりなく、レベルがとても高い。家財道具はすべて揃っていて、地方の公共施設も最先端技術が使われているため、地方と都会の見分けがつかなかった。

今お互い離れていても永久に別れるわけではない。この別れも良い思い出として胸に抱きつつ、いつの日か再び会うことを期待する。そしてまた、カンボディアと日本の友情が永遠であることを祈る。

青年招へい事業に参加して

ソッコン・チム
（ASEAN混成 教育グループ）

ASEAN混成教育グループを代表して述べておきたいことは、この青年招へい事業は、参加青年全員にとって、大変意義のあるプログラムだということだ。なぜならば、国のパフォーマンスの発表を通じてASEAN各国の文化を知り、グループディスカッションを通じて各国の教育の水準について学び、また、日本のPTAとの意見交換を通じて、日本の教育の水準や社会の理解を深めることができたからだ。さらに、日本人ボランティアの方々やホストファミリーをはじめ日本人の皆様と様々な意見を交わし、また体験を共有することにより友情を築くこともできた。

帰国後、このプログラムで得た新たな経験や知識を、各自の国の発展のためにできる限り貢献していきたいと思う。

最後に、2001年青年招へい事業ASEAN混成グループに私たちを招へいしてくださったJICA、そして、このプログラムに関わってくださった日本人の皆様方に心から感謝申し上げたいと思う。

■アジア

■インドネシア

“カラー・オブ・ライフ”

シティ・アユ・ミルナ・シスカ・サリ
（中小企業経営グループ）

私が「日本」と聞いて真っ先に思い浮かぶのは、富士山や桜のある美しい景色だ。そして、着物姿の女性。一方では頭脳明晰な人々が慌ただしく新型のロボットを創り出している、そんな印象である。だが、多くのインドネシア人は、なによりも「日本」という言葉に、ヤマハ、スズキ、アイワ、ソニーなどの自動車や、電化製品メーカーの名前を思い出すだろう。

当初は、たった28日間で日本人との友情など築けるものだろうか、日本の文化への理解を深めると同時に、専門分野について学ぶことができるだろうか……という迷いが少なからずあった。だが、始まってみるとプログラムはとてもうまく計画されており、この短期間のうちにそれらを達成することができた。その結果、私は「日本人とはどんな人々なのか」という明確なイメージを持つに至った。

社会的価値観、文化や習慣、ものの考え方など、相違点はたくさんあった。だが、違いを感じたからこそ、私たちは互いに興味をもち、そして世界を広げることができた。ここで私が気づいたことは、私たち人間は元来共通の価値観を持っており、社会的・文化的価値観の相違というのは成長の過程で生まれてくるということだ。私たちは一個人としてほかの一個人を見る際、社会的・文化的な価値観や、言語、種族の違いに気をとられがちだが、そうではなく「同じ社会の人間」として一個人と向き合うべきなのだろう。「違い」とは、この世界を豊かに彩る花なのではないだろうか。

初めての温泉体験

エスティ・ハルヤンティ
（行政グループ）

私たち行政グループは山形でホームステイを体験したが、この話はその時のエピソードである。

山形に行く前から、山形県は美しい街であるとともに、100以上の温泉を有するという話を聞いていた。ホストファミリーの方から、どこに行きたいかということを尋ねられた。約１カ月間にわたってかなりハードな日程をこなしてきたのだし、温泉でも入って美しい景色でも眺めながらリラックスしたらどうかと、温泉行きを勧められた。

インドネシアで日常使っているような布で体の一部を覆い、ミネラルを含んだお湯につかるというのが温泉に関する私の想像である。しかし実際温泉場に行ってみると、体を洗うためだけの小さなタオルひとつ持って、山形の人たちは一枚の布もつけずに真っ裸で湯につかっていたのである。驚きと同時に、男性・女性風呂と分かれていたのにもかかわらず、初めは恥ずかしさでいっぱいになってしまった。温泉に来ていた人たちが皆そのようにしているのを見て、悩む余地もなくそのしきたりに従うこととなった。入ってみると温泉の雰囲気は、素晴らしいものだった。忘れることのできない、初めての体験となった。

もし、山形を訪れることがあったら、ぜひ温泉に行くことをお忘れなく。気持ちいいですよ！

環境重視型の開発

リフィファ・マリンカ
（地域振興グループ）

開発プロセスにより引き起こされる環境への影響については、地球規模で様々な場で論じられている。学問的研究のパラメーターとまでは言いきれないまでも、環境問題に関して日本のインフラの現状（例えば発電所、ガラス工場、東京臨海副都心、その他）を視察したことは興味深かった。しかしながら私たちの考察によれば、日本では、開発計画において環境への配慮は緊急課題であり、実際インフラ整備事業の際には、常に周辺の環境を考慮している。

さらに一般的に言って、日本は多機能統合型のインフラ整備計画を策定している。例えば橋の建設の際には、自動車交通および鉄道交通のみならず、観光の名所としても利用する。

環境に対する配慮は、清潔好きで緑多い環境に対する意識が高い市民のコミットメントによっても促進される。日本人はごみを決められたところにきちんと捨てるなど、町の美化について規律正しい。行政レベルおよび市民レベルでの環境保全の努力を視察しあるいは日本の例に学ぶことは興味深いことだ。

インドネシアの開発の現状との比較をする場合、白黒をはっきりつける必要がないにしても、日本インドネシア両国間の背景的違いの存在を認識しなければいけない。なぜならば両国間では歴史、文化、地域開発の形態など背景が異なるからである。

とはいえ、日本のような環境重視型開発の精神とその意義は、インドネシアは日本から学ぶべき点である。少なくともこのことはインドネシアの国家開発および地域開発にとって有意義な比較価値を提供してくれるであろう。

この結論は、短期間ではあったが私たちが日本滞在中に学んだことである。できれば再び来日し、日本でより多くを視察できる機会があればよいと思う。

桜の国からのお土産

ワトミアニ
（教員グループ）

桜の国、日本にやってきて、彼らの規律正しさに驚嘆した。時間に几帳面で、交通事情やごみ処理システムが整っている。読書意欲が非常に高く、バスや電車の中や待ち時間にも熱心に本を読んでいる。これらからなぜ日本が戦後急速に発展してきたのかを理解した。

一方で、インドネシアとの大きな落差に悲しい気持ちもわき起こった。インドネシア人は規律正しさや読書意欲の面でまだ日本と比べて劣っている。彼らは本よりむしろ生活必需品の購入を優先する。これは経済的な理由のほかに、読者のニーズに合った本があまりないことが挙げられる。事実、私自身教員として教材にふさわしい本を見つけるのは非常に難しい。図書館で埃をかぶり、読まれないままに並んでいる本を見るにつけ、悲しい気持ちになる。思うに、豊かで多様な資源に恵まれたインドネシアも、日本同様の規律正しさ、勤勉さや読書意欲があれば、きっと日本よりも上の水準に達していたであろう。

しかしまた、私は日本にはないインドネシア独自の良さを誇りに思った。インドネシアの子供たちは、大人の干渉なしで互いに助け合い、苦楽をともにし、独自のつながりを築く。彼らの表情はとても生き生きしている。

美しい桜の国から、私はとても貴重なお土産を持ち帰る。今回日本で体験した良い面をぜひとも自分自身の家庭や職場の学校でも実践したい。JICAの方々に心より感謝の意を述べたい。

いろいろありがとうございました。

ぬくもり

チチャ・アリ
（農業グループ）

「日出づる国」「桜の国」として有名な日本への訪問は、私にとって今回が初めてだ。関西国際空港に降り立った私たちは夏の強烈な朝日の歓迎を受け、その呼び名の由来が本当だったということを実感した。

この日差しのように日本の人々が私たちを熱く迎えてくれるのだろうか？　旅の始まりに私たちはこのような疑問を抱いた。

「おはようございます」。この温かい挨拶を交わすことが私たちの日常となった。そして、私たちが訪れた様々な場所――大阪、東京、松山、宇和島、広島、京都――では、いつも温かく迎えていただいた。誠実で人柄の良い農林畜産業に携わる人々や研究者の方々からは、それぞれの専門分野について多くの知識を学んだ。まじめで優しい、お父さん、お母さん、お祖父さん、お祖母さん、お兄さん、お姉さん、弟、妹。そして、充実したプログラムに関わってくださった日本の友人たち。彼らのおかげで私たちは戸惑いを感じることはなかった。

「おはようございます」。この温かい挨拶を交わす最後の時が来た。来日当初の疑問の答えは、もう出ている。日本の人々は私たちに対してまじめで、誠実で、優しく、温かく、夢のような時を与えてくれた。しかし、私たちはその夢から覚め、帰国しなければならない。

夏の暑い朝日とともに私たちはインドネシアへ帰国の途に就く。私たちが育んだ、日本とインドネシアの熱い友好関係のように熱い日差しが降り注いでいる。

記憶に残るホストファミリー宅での出来事

ライラ・サフィラ・ムルニ
(ASEAN混成 経済グループ)

まず始めにJICAに感謝の意を表したいと思う。私は経済グループに所属して、日本に滞在できたことを誇りに思う。このプログラムは私にとって、生涯で最高の出来事だった。このプログラムは私に、自己開発や対人関係能力の向上、国際経験、日本での新しい出会い、意見交換のできる機会を与えていただいた。ただひとつ残念なのは、２度目の機会は与えられないことである。

誰もが忘れ難い大切なプログラムは、ホームステイだった。私たちの多くが、ホストファミリー宅では、ホストの子供、兄弟、姉妹となったのだ。ホームステイは、成功した日本の社会、生活様式、伝統、文化を知る裁量の方法である。そしてこれらの素晴らしいことを経験することは普通ではなかなかできないことなのだ。

私がホームステイプログラムに期待したことは、日本文化や社会を知ることだった。ホームステイの間、私のホストの家族が私の夢を実現させようと一生懸命なのに驚かされた。生まれて初めて着物を着る機会を与えてくれ、その時私が想像することができないくらい幸せだった。そのうえ、私が着た着物をお土産としてくださった時は、本当にびっくりした。私は日本の文化、特に着物を着る習慣に魅了されている。

私たちはともに過ごし、学んだ時間、経験や築いた友情が現在の結束をいちだんと強め、アジアの21世紀、平和と調和に貢献することを切に希望する。

■アジア

■ラオス

障害者のための社会福祉

カムセン・サヤウォン
(ASEAN混成 社会福祉グループ)

青年招へい事業で来日中、私たちはたくさんの経験を積めた。

例えば、日本における社会福祉制度は大変充実していて、障害を持った人たちに利用可能なものとなっている。また、多くのリハビリセンターや学校が整備され、障害を持った様々な人たちのために開放されている。さらに日本の障害者法に言及すれば、障害者は学校や施設で訓練を受けた後、また障害者手帳の発給を受ければ、すべての障害者は100%民間セクターで仕事を見つけることができる。

障害者は、自分の才能、力量、能力に応じ、発展の段階において重要な部分を担うことが求められている。

ラオス民主共和国の障害者のための戦略計画に関して、日本で得た職業訓練等の経験を結集させて、身障者が仕事を見つけられるよう努めていくつもりだ。

上尾での思い出

リーサン・サヤサン
（経済グループ）

このプログラムに参加し、言葉では表せないほど印象深い経験をした。

地方では、上尾市長・市議会表敬、加えて埼玉県知事表敬を行ったが、楽しい歓談となった。講義では、埼玉県や上尾市の経済・社会について説明があった。そのほか、市民と交流し笑顔に触れたが、まるで親が子に接するような笑顔であった。一番良かったのはホームステイである。私自身、日本人がこれほど穏やかな人たちだとは想像していなかった。

ホストファミリーの家では、温かく歓迎してくれた。家族の紹介をし、家の中を案内していただいた後、楽しい語らいとなった。私はこの語らいを通じて日本の良き社会文化・習慣を知り、思いやり、外国人に対する寛容さを感じ、お互いを理解し合えた。

歓送会は、本当に楽しかった。皆涙を流し、ラオス青年とホストファミリーの愛情と名残惜しさを表し、まるで家族の一員が旅立つのを見送るかのようであった。

この事業は、皆様のおかげで支えられている。私自身、ラオス人としてラオスと日本の交流が促進されることを願ってやまない。

■アジア

■マレイシア

青年招へい事業に参加して

ザイノル・アフマッド
（教員(中高校教員)グループ）

日本政府はもちろん、関係者の皆様に、このプログラムの成功に向けてご尽力くださったことに、心からお礼を申し上げたい。１カ月の日本滞在で、私たちは多くの情報を得るとともに、いろいろな体験をすることができ、それは素晴らしい思い出となった。合宿セミナーで、同じ職業の日本人青年たちとのワークショップやディスカッションを通して、日本の教育が抱える問題を知ることができたし、輝かしい未来を持つ世代の育成に、最良の方法は何かを探求すべく、話し合えた。ホームステイプログラムでは、日本人の生活や文化について、より身近に知ることができた。期間は短かったけれども、家族の親切やもてなしは大変感動的だった。

そして、いろいろ興味ある視察の機会が与えられた。例えば鵜飼い。大洲で、鵜という鳥が鮎という魚を捕まえるという、生まれて初めて目にする光景は非常に興味深いものがあった。四国と本州を結ぶ数多くの橋の見学では、その先端技術のすごさに感動したし、視察旅行での広島では戦争の傷跡が私たちの心にも深く残った。また、世界の平和がいかに重要であるかも。しかし、何と言っても、私たちが最も興味を抱いたものは、日本の社会そのものである。日本人の生き方、労働観は、私たちに、マレイシアにおける労働のあり方、規範変革の必要性を感じさせるのに十分であった。この日本を訪問することができて、今は感謝の気持ちでいっぱいである。もう一度心から「ありがとうございました」と大きな声で言いたい。

日本の青年招へい事業に参加しての思い出

マッ・イサッ・ビン・ンガティニ
（農業グループ）

このプログラムを通して、様々な経験と新しい知識、そして帰国後マレイシアで応用可能な農業技術などを得ることができた。

なかでも忘れられないことの一つは、ホストファミリーと共に過ごしたホームステイである。このプログラムを通して、日本社会でまだ脈々と守られている習慣の一部（家への入り方、食事の仕方等）を体験できたことを大変光栄に思う。

しかし、言葉の面では多少の障害に直面した――特にオカアサン。けれども、うまくコミュニケーションができたと思う。日本食を楽しんだことは、それが私にとっては全く異質な物であり、マレイシアの料理を大変恋しく思ったとしても、忘れられない貴重な経験となった。私のために用意してくださった日本の伝統料理は、普段は冬の料理とのことであったが、大変おいしく、まるで私にマレイシアにいるような食欲を起こさせた。また、両国の社会・文化やお互いの日々の生活などについても話し合った。65歳になる一人の年長者として、オトウサンは私に家庭生活の問題など、多くの参考になる経験を話してくれた。

これらの経験は非常に大きな意味を私に与えてくれた。マレイシアに帰国後はそれらを活用してみたいと思う。

最も心に残る経験

カマリアー・ビンティ・アブドゥラー
（ASEAN混成 公共公益(観光)グループ）

このプログラムを実現し、実り多いものにしてくださったすべての方々に対し、この場をお借りして心からのお礼を申し上げることができ、光栄かつ名誉に思う。

このプログラムは大変素晴らしい企画であり、私たち、日本とその文化、人々、食物、伝統、高度な技術、そして歴史についての知識、経験、視察、理解を与えてくれた。ホームステイは日本の生活様式を知る良い機会だった。合宿セミナーは日本についての理解を深めるための交流や知識の共有の有効な機会となった。プログラム中に行われたすべての講義は本当に有用で、ここで得た知識は自国に持ち帰り、役立てたいと思う。

全体として、このプログラムは私たちにたくさんの利益と知識をもたらしてくれたが、とりわけ私たちの国と日本との友情を深めることに役立った。ほとんどすべてといってよい分野について、様々な面から学ぶことができたが、その中には、日本の文化、伝統、労働観や技術も含まれる。私たちは、ここで学んだ知識を、すべてとは言えなくても少しでも、私たちの職場で活用したいと思う。日本での経験は忘れ難く、私の心の奥深く刻まれたものとして残ることだろう。

日本人の食文化

プトゥラ・ヌルワン・シャー・ビン・バハルディン
（中小企業経営グループ）

私は日本人の食文化に大変興味をもった。彼らは新鮮な生もの、ゆでた食べ物を好み、油は少量である。料理は人目を引くように、食欲をそそるように飾られている。私自身はダイエットが苦手である。各料理に野菜や果物を添え、炭水化物、タンパク質等のバランスが考えられていることが、ホス

トファミリーとの生活で分かった。また、会議の時に、飲み物や菓子類を用意しないことも知ったし、あってもお茶くらいのものである。これは私にとって初めての経験であった。また彼らは午後のお茶の時間をもたない。日本人は通常朝食、昼食、夕食をしっかりとる。砂糖を用いない日本茶が一般的で、会議の時にもそれが用意され、一般の人々のために缶入りになったものもある。これは大変便利である。食事は計画的で、砂糖を少量にしたものを飲む食文化は日本人の健康、活力、肥満解消の源であると思う。私はこの文化を自分自身、家族、職場に徐々に取り入れていきたいと思っている。

スウィート・メモリーズ・イン・ジャパン

ノールハナ・ビンティ・ヤアコブ
(行政(地方行政)グループ)

青年招へい事業はマレイシア公務員にとってあこがれのプログラムだ。それは実際に日本を訪れ、その生活と文化をより間近に見る機会が得られるからで、参加の話をいただいた時の喜びは言葉では言い尽くせないほどだった。そして実際日本での滞在は素晴らしい経験となった。なかでも忘れられないのは神戸市垂水区に住むホストファミリーとの思い出だ。家族とのやりとりは大変だったが、それでもいろいろな話や体験を共有できた。学んだ日本語をフル活用し、時には身振り手振りを交え話したことが懐かしい。また、家族と姫路に行ったり、日本の様々な手工芸品の製作を体験させてもらったりした。夢中になるあまりホームステイから戻る時間を忘れてしまいそうになるほどだった。そのほか、コーディネーターの専心ぶり、出会った日本人青年の姿にも深く感銘を受けた。宗教、民族、言葉や国が違っても、その壁を乗り越え一つになれると、彼らと接する中で学んだ。このかけがえのない経験や思い出が私たちの成長の糧となり、同様にほかの人にもこの機会が与えられるよう祈ってやまない。

日本での経験

ノール・シャム・ビンティ・ラーマン
(地域振興グループ)

JICAの青年招へい事業で滞在した日本での経験は、私の人生において忘れられないものとなった。この地に初めて足を踏み入れた朝のことは、まるで昨日のことのように思い出される。満開の花をつけた桜の木は、あたかも、私たち76人の「公務員です」グループの来日を歓迎してくれているかのように揺れていた。その時、パラパラと降る雨はまるで私たちの来日に幸せをもたらすかのようであった。私がその後知り合った日本人によると、今年は桜の開花が例年より２週間ほど早いとのことであった。このプログラムを通して、日本社会の発展の歴史や文化、芸術、そしてものの考え方と国の発展のために一つになる精神など日本人の社会と生活を実際に学ぶことができた。広島の原爆で多くの日本人が苦しんだことや、公害による水俣病のことについて学んだことは、大変深く心に残った。日本とマレイシアの間に芽生えた友情の絆がいつまでも続くように、そしてこのプログラムから得た知識と経験が、自分のみならず、宗教、国民、そして国にとって有益なものとなるよう生かしていきたいと思う。

■アジア

■ミャンマー

教育の花園

ミャ・ミャ・サン
(教育グループ)

美しく芽吹き生い茂る樹木にとって最も重要な時期は、育成の時期である。人間や民族、国家の発展にとって最も重要な時期も、幼時に知識を求める時期であると言える。国家の発展は、教育の上に築かれるものだ。中学校までの義務教育制度が確立されていることは、日本の将来を担う子供たちの教育にとって、大変素晴らしいことである。

各小中高等学校において、組織が整い、音楽室や理科実験室において教材が豊富に使用でき、水泳の指導や各種スポーツが体育として行われているなど、子供たちにとって楽しいことばかりだ。全国の都道府県に群馬県総合教育センターに類する教職員研修機関があり、教職員の方々にとっては、汲めども尽きぬ黄金の壺を所有しているのと同じで、大変価値のあるものだ。

国家発展のための教育改革を各教育委員会が行っている。生徒たちが指示に従うことや学習すること、教師が教えることは、「教育」の中にのみ存在する。それ故に、教育の「黄金の壺」である各地の教職員研修機関において研修を受けた教職員が、その成果を現場で役立てている日本の教育の将来は、木の実がたわわに実り、花が咲き誇っている庭園に大変よく似ている。

日本人が時間を大事にすること、仕事に価値を置くこと、規則をきちんと守ること、元気できびきびとしていることなどは、ぜひ見習い、尊敬すべき事柄である。これらは皆、ミャンマーの将来の宝である子供たちに手渡しで分け与えていきたいと思う。国家の発展とその理想的な建設のために張り切っているミャンマーの生徒たちも、きっと強い興味を抱くことだろう。

■アジア

■フィリピン

日本で実現した私の夢物語

アビゲイル・ベンテランザ・グレゴリオ
(教員(小学校教員)グループ)

いつかは現実になると信じてきた私の夢物語は、5月9日に日本へ来た時に始まり、28日間続いた。最初は楽しい日本語クラス。自分たちだけで出かける時には、基礎的な日本語の知識がとても役に立った。私たちが日本語を話すたびに日本の人たちが喜んでくれる様子が見てとれ、心温まる思いがした。

日本人は、伝統的な価値観を大切にしている。本物や美しいものを残す努力もしている。独自の文化を愛し、日本らしいものを伝えてゆくために、神社仏閣を保存し、博物館を建て、礼儀正しさや勤勉性という国民性も、着物を着て草履を履く生活も健在だ。

花や木、鳥、魚、海、澄んだ空気に囲まれて過ごすという私の夢も現実になった。日本人は自然を愛する心を持っている。子供も大切にし、可能な限り最高の教育を与えようとする。学校は子供たちにとって、本当の家庭のような存在である。1クラスの生徒数が少ないので、教員には生徒の一人一人を理解するだけの余裕がある。生徒たちの英語の学習熱は高く、幼稚園から教えているところもあった。

私の夢物語は、6月5日に終わった。今後も私は、おとぎ話の主人公のようにいつまでも幸せに暮らすことだろう。日本と日本人の素晴らしい想い出を胸に抱き、いつかまた日本に来て、お世話になった方々にお礼を言える日を夢見ながら。

最高の招へい

ジェリコ・L・P・レイエス
（農業グループ）

「最高の招へい」――今回のプログラムはこの一言につきる。このような有益な講義、素晴らしい見学、心温まるもてなしをほかのどのような招へいで経験できるだろうか。

ネオンや日本人の都会の暮らしに驚いた。農業技術の多くは私たちにとって夢見るものばかりだった。官僚制度の有効性も見習うべき点で、日本が先進国であるという見解は、今も変わらない。

一方、私たちは日本の別の面も知った。日本の農業分野の成功には感銘を受けたが、忘れ得ぬ旅にしたのは、私たちが出会った人々だ。沼津市長が述べられたように、経済や基盤整備の強化も大切だが、人を育て、幸せな暮らしを営むことが最優先にされるべきである。往々にして高度な工業化を目指すとこの最優先は後回しになる。

もし、日本を人間とすると、身体の異なった機能がうまく補い合っている部分を見る機会に恵まれた。東京では、戦略・効率・責任という理性、沼津では、優しさ・繊細さ・寛大さという心、広島では、傷跡から見事な回復という精神を見ることができた。

この機会に、私たちフィリピン人も経済の自立への道を進め国と人々の豊かさを、世界の方々を招待して見ていただけるようになりたいものである。地上には、壁がないこと学んだ。地理、言語、思想も、このプログラムの真の目的を妨げることはできない。その目的は、日本をより理解することだ。ほかのどのような招へいも、これに勝るものはない。

私の目から見た日本

ロエナ・ミランダ
（中小企業経営グループ）

知らない土地を旅行し、新しいものに触れることが一番良い学習方法だと言われている。28日間に及ぶ青年招へい事業で、日本とフィリピンの文化の類似点と相違点について学び、数え切れないほどの素晴らしい友達と思い出ができた。

日本人の家族や友達ができたこと、そして日本での思い出は計り知れない価値のある私の宝物となった。いつも学び、人の力になりたいという日本人の優しさに心を打たれた。ホテルやレストランの従業員の仕事ぶりもプロフェッショナルなものだった。訪問先の企業の従業員だけでなく、社長にも、温かく歓迎していただいた。今回の青年招へい事業で、日本人が大変親切な人たちであることを実感した。

訪問のプログラムの内容は効率的で、時間が有効に使われた。青年との討論、スポーツ等、様々な活動を通して、日本人や日本の文化について理解が深まった。江戸東京博物館の見学で日本人の過去の様々な生活スタイルについて学んだ。フィリピン人と日本人との類似点・相違点について学んだことにより、両国間の青年の理解がさらに進み、またビジネスの交流も増えると思う。

エコポリスで環境教育の重要性を、広島平和記念館では世界平和維持の重要性について学んだ。幼少のころからの教育が大切だと思われた。記念館の見学は平和の大切さを学ぶと同時に戦争の悲惨さを深く感じた。

日本で学んだ最も素晴らしいことは、近代産業と自然環境の調和である。大都会である東京のどこへ行っても塵ひとつなく清潔で、公害もなかった。

うちわ作り、茶道、座禅を通して日本の文化を体験した。日本人は心を込めて製品を作っていることも学んだ。歴史と文化の集積が伝統産業製品であると訪問先の社長が説明され、そしてフィリピンでも歴史伝統に基づいた独自の製品を作るように奨励された。

また日本に来る機会があれば、第二の故郷である山梨に行きたいと思う。

日本の朝—時間という要素

エマニュエル・サント・トマス・サンフォアン
（行政グループ）

日本の特徴として、約束の時間を守ること、予測を立てて適切なタイミングを見計らうこと、そして朝を大切にすることである。日本の歴史、生活習慣、文化は「時間的要素」の産物と言っても過言ではない。

日本は世界の普遍的な新文明、発見を受け入れるのに最適なタイミングで鎖国を解き、国を開いたのである。世界から身を閉ざしている間に、日本は完璧な日本流儀を築き上げ、世界が長い時間をかけて技術革新に至るのを待ち受けていたのである。

新しい世界に触れるや否や、日本は一瞬も逃さず近代化を学び取り、すぐさま対応し、近代化に更なる磨きをかけたのであった。新発見に適応し、それを凌駕しようとする意欲が「勤勉な日本人」つくりあげた。時間を無駄にせず、タイミングを逃さず、仕事をやり残さない規律性が実を結んだのであった。

先見性というのも日本の特質の一つである。起こり得ることを予測して備えるのである。備えあれば憂いなし、なのだ。

日本ではまた、古いものと新しいものが様々な場所で共に息づいている。街を歩いていると、モダンな地域に歴史的な建物があり、また、歴史的な地域に新しい建造物があったりする。それはあたかも、将軍が大名にコンピューターで指示を与えたり、木造の家にロボットが住んでいるのを見るようである。

日本の朝は早い。人々は夜明けを心待ちにし、もう一度素晴らしい時が訪れるのを待っているのである。

日本とじかに触れた28日間

リオ・ロサレス・コンプラ
（地域振興グループ）

青年招へい事業は私たちにとって実り多いものとなった。多くを学び、多くを分かち合った。

地域振興の様々な面においての日本の経験やオリエンテーションを聞き、政策・開発プロジェクト立案者として、今後考慮すべきいくつかの分野を見いだすことができた。民間部門が地域振興に努力している組織や施設を見学し、地域振興促進のために民間とパートナーシップを組んでいく大切さを心に深く留めた。

老人や身障者に日本政府が多大な関心を払っていることは、身障者教育施設を見学してよく理解できた。こうした社会的弱者へのかかわりを全体的な社会発展の中に組み込んでいくには、社会の各部門が真に調和していかなければ達成できないことを学んだ。

徳山市でのホームステイでは多くの忘れられない経験をした。わが家のような居心地の良さと家族の温かみを感じた。そしてそれこそが私たちが期待していたものだった。

自主研修の日に、自由に動き回った時には、自分たちの目で日本と日本人の日々の様子を観察できた。また、私たちの上手ではない日本語を練習するいい機会にもなった。そこで、日本の急速な発展の主な要因の一つは、規律正しさであることに気づいた。規律正しいことは日本人にとっては習慣となっており、刑罰を恐れてルールを守る努力をしているだけではないことを、この目で見た。

全体としてこのプログラムの目的は達成されたと思う。私たちの専門分野の知識を増やすことができただけでなく、それ以上に大事なことは、私たちと同様の職務に就いている日本に方々と有効を結び、意見を交換する有意義な機会を得たことである。

しかしながら、このプログラムの真の成功は、私たちのそれぞれの専門分野で学んだことをどれだけ実際に活用できるかにかかっている。そしてそれは、私たちの双肩にかかっている。

日本にさよならを言うとともに、JICAが蒔いた種を育てていくことを約束する。

さようなら、友人たちよ。どうもありがとうございました。

MARAMING SALAMAT PO（ありがとうございました）

アドニス・L・ダンテス
（ASEAN混成 保健衛生グループ）

日本はその優れた経営システムや、高度な技術分野で、世界に知られている。そこが隣人のASEAN諸国より優勢に立つゆえんとなっている。

28日間の日本滞在中に数多くの経験をし、日本人と日本の社会を理解するのに大いに役立った。訪れた先々では温かく歓迎していただいた。日本の青年たちとの意見や情報の交換、各施設の訪問、そしてホームステイ。一緒に過ごせる時間が十分あったため、強い絆で結ばれ、お互いの理解と仲間意識が生まれた。また、同じグループのASEANの仲間とも親しくなれたし、各関係者の誠意あふれる熱心なサポートもありがたかった。

今回学んだ多くの技能、知識、心構えによって、ミサミス・オキシデンタル州における、看護保健教育推進担当としての自分の仕事を、より成熟した、責任感の強い、真摯で自信に満ちた態度で行える人間になれたと思う。

この青年招へい事業に参加して学んだことから、私が自国の人々、職場の同僚に伝えたいことは、技術的なことより、効率的なシステム、仕事に対する一生懸命さ、時間を有効に活用すること、そして、計画を実施に移す際に、最も有益な方法を用いること等である。全部その通り真似ることが最良の形ではないにしても、それによって、改善の方向に踏み出すことは確かである。そしてそれは私の国の人々にとって、物理的にも、道徳的見地から言っても、そして文化的背景からしても十分に受け入れやすいものであると思う。

終わりに、JICA並びに日本政府に多大なる謝辞を述べたい。

ありがとうございました。皆様のご長寿をお祈りします。

■アジア

■タイ

計り知れない贈り物

チャリニー・チョンチット
（地方行政グループ）

今回学んだ日本の文化・慣習そして日本語は、人生への計り知れない贈り物である。

大阪国際センターは第二のわが家のようであった。

毎日、日本に関する基礎知識と日本語の学習を受けたが、飽きる者はいなかった。

東京では「一村一品運動」の講義を受けた。タイでもこの運動に関する講義が行われ、私たちもその内容を聞いてはいたが、今回改めて十分な知識を得た。私たちも現政権の政策に基づき、地方の特産品の普及促進に努めたいと思う。

また、日本人青年との合宿セミナーも印象的であり、十分な意見交換の場となった。

ホームステイでは温かいもてなしを受けた。言葉の壁を超え、互いの心が通じ合ったと思う。歓送会では「お父さん・お母さん」から受けた慈愛を思い、誰もが涙した。

次に涙したのが広島の原爆資料館である。

悲惨な状況の記録映画に皆が戦争への恐怖を感じた。原爆投下以降の広島の様子が私たちの心を釘付けにし、全員に平和を祈願する心が芽生えた。

日本人の娘

セーンジャン・メータートゥラグン
（地域振興グループ）

見ず知らずの人と生活を共にするというのはどういう感じなのだろう？　皆気軽に想像するだろうが、本当に感じたことを言えるのは、それを経験した者のみである。

なかでも一番の思い出はホームステイだ。短時間ではあったが家族の一員になり、楽しく貴重な経験をした。

“お父さん”“お母さん”私と犬がその家族である。犬は留守番役で、いつも帰宅した私たちを迎えてくれた。“お母さん”は私を実の娘のように愛し、“お父さん”は日本について多くを教えてくれた。日本語の知識が乏しかったものの、ジェスチャーでの意思疎通もまた楽しかった。

茶道を教わったことも価値あることだった。茶道の作法は自己啓発のための良い訓練である。そしてこの瞬間私は自分が日本人の娘になったような気がしたのであった。

この経験から得たものは計り知れない。“お父さん”“お母さん”に心からお礼を言うと同時に、ほかの青年たちにもこのような機会が訪れることを願ってやまない。

日本人とその社会について理解を深めた経験

チャヤコーン・ピヤバンディクン
（ASEAN混成 科学技術グループ）

日本はどのようにして世界経済のリーダーになったかについて、多くの人が知りたいと思っている。その答えは、熱意、意欲、時間厳守など様々なことが挙げられるであろう。

青年招へい事業への参加は日本の生活様式と日本の社会を学ぶ良いチャンスであった。

まず、JICA職員、豊川市国際交流協会のボランティア、コーディネーター、および企業社員の働く様子、次に日本の家庭で受けたもてなしと親切、また茶道などの伝統的な儀式、そしてボランティアグループの協力姿勢から多くのことを学ぶことができた。さらに京都で金閣寺や御所、広島で平和公園など歴史的な場所を見学して様々なことを学んだ。

とりわけ私たちが、感動しながら、楽しい時を過ごせたことが何より素晴らしい経験であり、このプログラムにかかわってくださった皆様に心よりお礼を申し上げたい。この忘れることのできない友情は「終わりのない物語」となることであろう。

忘れられない３つのこと

プラユット・セーターピロム
（中小企業経営グループ）

今回の日本訪問で大変印象深かったことは３点ある。

１つは支えてくれた日本側のスタッフ。

２つ目は、私たちを歓迎してくれた訪問先である。そば粉工場やせんべい工場では、私たちは実際に自分の手で、そばを打ったり、せんべいを焼いたりして、自作のそばやせんべいを味わった。日本の美しい観光地や史跡、広島では核兵器の悲惨さに思いを馳せることができた。

３つ目は、知り合った日本人青年である。最初のうちは、これほど日本人からよい印象を受けるとは想像しなかった。しかし短い期間で末長い友情が生まれたのだ。合宿で知り合った青年たちは、わざわざ栃木県へ私たちを訪ね、再び楽しく交流した。また栃木を離れる時には駅で涙の別れをし、再び会うことを誓った。

私たちはタイという国への理解を広める親善大使の役割も果たした。ホームステイでは日本人の家族の一員として日本人の生活を知ることができた。私たち23人の参加青年が協力し合って過ごしたこの１カ月の思い出や経験を忘れることはないだろう。そしてタイと日本の友情もまた同じように続いていくだろう。

日本を訪れて

ウィーラダー・ナーヴィチャー
（教員グループ）

日本は一度は訪れるべき国である。広島に原爆を投下され、廃虚となった後に復興し、さらに技術・科学分野で優秀な人材を輩出している。私たちタイ教員グループは今回の日本訪問で様々なことを学んだ。私公立学校を視察し、教育システム、教授法を学び、日本人青年と意見の交換もした。学校教育では、自分で生きる力を育むことに重点が置かれているということを知った。また、一人の人間として子供の権利を認めること、障害者にも平等に社会参加の機会が持てるよう、配慮されていることも併せて学んだ。

最後に、友情をありがとう。日本で得た知識や体験を自国でさらに発展させ、日本の素晴らしい文化を広めたいと思う。今回の訪日は一生の思い出として心に残るだろう。

私が見た日本

チャイヤポーン・タップティムトーン
（林業グループ）

これまで、タイの林業は多くの森林を破壊し、現在、森林面積は国土の40%にも満たない。貧困のために自然資源を奪い合うタイでは森林保護が難しい問題となっている。一方、日本人は森林の役割を理解し、環境保護や生物保護は、現金収入よりも価値があることを知っており、森林を保護し、一般国民の役に立てている。この日本の森林管理の方法をタイ国発展のために役立てたいと思う。

日本については小説、漫画、テレビ等で多少の知識はあったが、実際に、関係職員の方々、ホストファミリーの方々に思い描いていた以上に温かく迎えていただき、感激している。日本の技術発展は私たちの国とは違いがあるかもしれないが、友情と真心は私たちに共通しているものである。また、日本人の責任感の強さと、規律正しさはどこに行っても見受けられた。これらの思い出は永遠に忘れることなく、いつまでも私の心に生き続けるだろう。

■アジア

■ヴィエトナム

心からの感謝

トルオン・ティ・ホン・ハイン
（教育グループ）

青年招へい事業での28日間は想像以上に早く過ぎ去った。日本の古から伝わってきた風習、稲作文明の特色、恵まれた気候、豊富の自然の美しさ、訪問客に尽くす心、親愛の情があふれる民族、これらの点はわが国と共通で、祖国を離れている私たちのホームシックの心を癒してくれた。28日間という期間は、日本と日本人を深くかつ完全に理解するのに十分な時間とはいえないが、たおやかな美しさをもつ大阪、モダンで美しさが目を引く東京、みずみずしく詩になる山梨、雄大でくめども尽きない情感をたたえている富士山のある静岡、静けさの中にも情感あふれる島根、平和を象徴する広島、誰にでも愛され、伝説のある古都京都などがすべて、私たちの心の中で薄れることのない思い出になるだろう。

東京に足を踏み入れた時、ちょうど梅雨の最初の雨が降っていた。その時、日本人のプログラムコーディネーターから傘という大変意義のあるプレゼントを頂いたこと、それから飛行機が出雲空港に着陸していた時、飛行機の中から、風に揺られている愛する祖国の国旗の色が目に映った時のこと、温かい手、花束、ヴィエトナム語での挨拶、ヴィエトナム語で書かれた歓迎の垂れ幕、コーディネーター、日本人参加青年、ホストファミリーの誠実さや私たちへの細やかな気づかいなどの奥ゆかしさが私たちの心を打った。

帰国する直前、日本人青年から受け取った国と国とに広がる美しい友情を物語る一通のお手紙をコピーし、全員に配った。私たちにはこの上にない貴重なものとして大切に取って置きたいと思う。心の底から、この有意義なプログラムを企画、参加してくださった方々に感謝の念を表したい気持ちでいっぱいである。

青年招へいでの日本についての感想

タィ・チャウ・バウ
(公務員(社会福祉)グループ)

短期間の研修だったので、私にとって感想文を書くことは自分の器量を超えるような感じだが、今回の出来事の感想をここにまとめる。

日本人・日本国について。日本は第２次世界大戦後早くから復興し発展してきた。日本がいち早くG7に参加できたことや、今日の成果は先輩たちの無我夢中の労働の貢献であると認識した。日本人は、友好的で・誠実で・規律を重んじる。日本の人々にはとても良い印象を持っている。

プログラム実施の準備は詳細にわたって行き届いており、企画、時間や行程の配分、後方支援態勢まで周到に準備されている。研修、意見交換、交流、討論、施設見学等が合理的に組み合わさったプログラムだった。

ホームステイは特別な思い出を私の心に残した。すごく楽しかった。48時間と短い時間だったが、生涯忘れられない記念となった。ホストファミリー宅で「Canh chua」（カイン　チュァ、日本人は酸っぱいスープと呼んでいる）を作ってみんなに食べてもらった。エビ、魚、トマト、キャベツ、モヤシ、オクラ、トウガラシ、セロリなどを使って一生懸命作った。「おいしいです」の声を聞けた時は、言葉で表現できないほど幸せな感じがした。私たち４人（兄さん、姉さん、私とタクジ君）は、初めて同じ屋根の下に住んだのに、自然と息が合い、まるで古くからの知り合いのような感じがした。

最後に、先進国である日本で学んだ貴重な経験を活かし、ヴィエトナムをより豊かな国にしていくために責任感を持って貢献していくことをここに誓います。

今回の旅への思い

アン・ディン・ゾアイン
(農業(地域振興)グループ)

日本そして日本人を自分の目で確かに見た時、自分の念願はとうとう実現できたと確信した。私はグループのメンバーと一緒に大阪、宮崎、広島、京都、奈良と、５つの県を訪ねた。これらの場所のどれも農業が盛んで、また日本の古い伝統文化が多く残っている場所でもあった。どこへ行っても親しく迎え入れられ、また周到なもてなしを受けた。私自身の見解の範囲で、講義・施設見学を通して私は日本人の意志の強さや精神力により感服した。戦後の悲惨な状況から、日本人は自分の手、自分の知恵で日本を世界一の強い国にした。

ホストファミリー宅のお父さん、お母さんや、合宿セミナーで出会った日本の友人との美しい思いではいつまでも忘れることがないだろう。一度も会ったことがない異なる２つの国の青年がなぜここまで深く気持ちが伝わるのだろう。人の気持ちは様々な困難、言葉・習慣・風俗の違いを乗り越えたと思う。このことは東洋文化の骨格を持った日越の、共通点の多い文化をもっている２つの民族だからこそあり得るのだ。

１カ月近くの日本滞在の間、有機農業による生産、農業協同組合、農村経済、一村一品運動など、新しく珍しいものを多く学んだ。私の仕事に学んだ経験を役立てたいと思う。

日本の印象

チャン・ティ・トゥー・フオン
（経済グループ）

今回の青年招へい事業に参加することができたのは、私にとってラッキーな出来事だった。

日本は戦後めざましい経済発展を遂げた国、高品質の製品を作っている国、伝統文化と勤勉な労働力をもつ扶桑の国であるという。この眼で日本を見、日本の経験を学びたい、日本人と交流したいという渇望をもって私は来日した。短い滞在期間であったが、日本の中小企業、日本人の仕事に対する責任感について私は理解することができた。

ある講義での私の質問に対して、後日会社の担当者が直接私に会って説明をしてくださったこともあり、私は大変感動した。

今回のプログラムを通じて、私は日本の女性は社会の中で弱い立場にあると感じた。日本の男性には、女性が自分の能力を発揮できるよう努力してほしい。

私がここで学んだことは、自分の業務の中で活用し友人たちに広めていきたい。日本、そして日本人についての美しい印象は、私の記憶の中で色あせることはないだろう。

日本の適切な選択

ハ・ホン・ハ
（ASEAN混成 環境保全グループ）

私は日本人へ敬意を表し、高く評価したいと思う。日本滞在中、けんか腰のような気性の荒い人は見かけなかった。皆、特に釧路の人々は穏やかで親しみやすい人々だった。京都、広島で神社や歴史的な所を訪れた際に、日本人がどれほど歴史や、国を築いた人々に対して尊敬の念を持っているかを知った。多分、日本人は環境や文化遺産を守るための様々の努力をしながら自分たちの洗練された価値観や基準に基づいて文化の発達した社会を築いているのだろう。

日本人はロボットや人工の島やその他時代を先んじる数々の素晴らしいものを作り出している。そのためには多くの新たな問題、困難に直面することを余儀なくされるが、日本人は人々の明るい未来に向けての道を探らなくてはならないのだ。西欧の先進諸国と異なり、日本人は２つの目的――発展と世界平和を遂げるために頑張っている。

広島原爆ドームと平和記念館を訪れた時、また北海道や広島で日本の若者と話し合った時にこの考え方が十分理解できた。平和と繁栄が日本人の選択なのだ。私は素晴らしい選択をしたと思う。日本人は見事に成功し、世界を驚嘆させた。新幹線で旅をすれば、日本人は日本人自身が考えている以上にパワーがあるということを理解できる。

日本とヴィエトナムの友好万歳。

■アジア

■東ティモール

日本の中の沖縄

ヴァレンティン・スピノラ・P・M・ソアレス
（青年指導者グループ）

約１カ月の日本滞在中に、私は日本のいくつかの歴史的な場所を訪問した。JICAの青年招へい事業において、一人の青年指導者として、私は多くの有意義な経験を得ることができた。特に日本の人々との交流を通して得た経験は、将来青少年の育成を行う上で大いに参考となった。その中でも、私にとって最も印象的だったのは、沖縄を訪問したことである。そこは素晴らしく美しい島で、友好的で平和を希求する人々がいた。しかし、沖縄には米軍基地があり、その存在に反対を訴える住民の声を聞き、悲しみが込み上げてきた。そのほかに、大変印象に残った場所は広島だ。世界の恒久平和を実現しようと、積極的にかかわっている人々と街の姿があった。

目覚めよ、沖縄。
眠るなかれ。
君の将来は
君の掌にかかっている。
I LOVE OKINAWA

■アジア

■バングラデシュ

日本で学んだこと

アブドゥル・ロティフ
（社会福祉１グループ）

今回の青年招へい事業に参加して、私たちは社会活動、日本文化、日本人について学ぶことができた。多くの社会福祉関係の施設を訪ね、子供の養育や高齢者の世話、障害者に対する訓練やリハビリ、医療保険等について学んだ。

ホームステイや合宿セミナー、その他のプログラムを通じて私たちは、日本人が労働意欲にあふれ、寛大で平和を愛し、人を助け、時間を守り、友好的であることを知った。それらは愛知県で実際に知ることができた。日本では政府の主導により国民の健康環境を整備し、子供たちの世話をし、障害者を社会復帰させ、失業者に再就職先を世話し、学生に最新の政策や方針を学ばせる。こういった経験によって、私たちは福祉の分野で活動している人たちがなにを必要としているかをより一層理解することができるだろう。プログラムで得た多くの情報は自国に帰ってから活かすことができる。

かんでんエルハートと愛知県立心身障害者コロニーでは、身障者が健常者のように働いている姿を見た。身障者を国のお荷物と見るのではなく、国の財産とみなすべきであることを政府に提言していきたい。児童や高齢者の養護活動や介護保険などを国で実現させていきたい。私たちは日本人が勤勉で平和を尊び、時間に正確で、親しみやすい性格であることを知った。私たちがさらに責任感を持ち、規律正しくなるために、自分自身や国を改革しなければいけないと思う。

青年招へい事業の貴重な体験

スワポン・クマール・ハルダー
（社会福祉２グループ）

青年招へい事業は、日本と日本人について理解を深めるための格好のプログラムであったと思う。

東京、大阪、広島そのほか日本各地で、ホームステイ、合宿セミナー、日本文化体験等を通じて私たちはたくさんの日本人に会い意見交換し、日本人が誠実で協調性があり平和を愛する民族であると知った。

講義や、ぱれっとを支える会、身障者リハビリセンター、老人総合センター、保育園等の福祉施設訪問を通じて、基盤設備の充実と身障者雇用促進策の大切さを痛感した。日本で学んだことは、わが国の社会福祉の発展のため非常に参考になった。

日本人が時間を厳守し、誠実な心を持ち、大変友好的で、平和を愛する人々であることも、ぜひ母国の人々に伝えたい事柄である。

日本での滞在期間は短いものだったが、両国を末永く結ぶ友好の懸け橋が培われ、私たちの体験が将来のわが国の発展に寄与するものと信じている。

日本よ永遠なれ！　JICAよ永遠なれ！

■アジア

■インド

青年招へい事業について

クリシュダス・アニルクマール・ティシェンプリー
（農業グループ）

どんな国の文化も直接体験された時に最もよく理解される。JICAの農業プログラムによって日本の農業と同時に豊かな文化・伝統そして生活様式の概観を得ることができた。期間は短いが、農村社会・農協の役割・市場のメカニズム・種々の農業関連機関相互の優れた連携を深く理解することができた。

２週間滞在した帯広の寒さも、活発な市民の温かさに圧倒され感じられなかった。プログラム中最重要なホームステイは日本の方々の生活への洞察を得、合宿セミナーは日本的生活の種々の断面を学び、味わう絶好の機会だった。セミナー会場の内と外（パークゴルフや文化体験の時）でのフランクな交歓は、日本をよりよく理解するのに役立った。東京・京都・広島への訪問は、もう少し長ければという思いはあるにしても、私たちの滞在を豊かにするものだった。農業で使われている新技術、農協の役割、農業のあちこちに見られる強い連携等は、メンバー各人がインドでも見習うべく努力するだろう。プログラムの優しい思い出はいつまでもメンバー全員の胸に抱かれ続けることだろう。

日本の社会基盤と日本人

アニル・マリック
（教育グループ）

この４週間の研修は私たちの陣全体に非常に役に立った。この研修は、開発途上国から来た私たちの多くにとり、開眼させられるものとなった。日本は先例のないほどの社会基盤を整備し、偉大な社会、平和を愛し、規律正しい国民をつくりあげた。

教育制度は、現在の日本社会の姿を形成する上に非常に大きな役割を担っている。日本人の世界観の最も基礎となる部分は、学校の初等教育の中で強く植え付けられる。丁寧さ、申し分のない礼儀作法、他人への思いやり、集団意識、規律正しさ等は生徒により吸収される。

私たちのホームステイは日本の文化を十分に理解するのに役立った。食事様式、大きな浴槽、そして一般的に多くの事柄が共有されていることに私たちは感銘を受けた。いかにして、インドが日本のように第2次世界大戦後の廃虚から復興し、そして30年間で経済大国となれるのかを学ぶことができる。そのためには、私たちの倫理気質を普通の日本人の水準に引き上げなくてはならないだろう。

■アジア

■モルディヴ

平和宣言都市

アイシャ・ハビーブ
(教員グループ)

世界的に有名な広島は、ぜひ訪れてみたい場所の一つだった。子供の頃からいつの日か訪れることを夢見ていた。

ついに10月11日広島を訪れることができたが、私の描いていた所とは全く違った都市だった。私は自分の目を疑った。あの原爆の後で、こんなに完全に復興するなんて、まるで奇跡としか言いようがない。でも奇跡が起こったのだ。広島は見事に復興していた。

平和記念公園と原爆資料館を訪れたが、それはまるで原爆の悲劇の追体験であった。被害者の生々しい傷跡の展示やビデオを見て、ほんの一瞬の間に命を失った無実の人々のことを思い、涙を禁じ得なかった。原爆ドーム近くの橋にたたずみ、56年前の原爆投下前の平和な町の様子を想像してみた。

私は世界中の人々がこの平和宣言都市を訪れ、原爆がもたらした惨事に思いを馳せて欲しいと思う。この地球上において核兵器の使用は禁止されるべきだ。世界は大国のために存在するのではなく、この地球上に生きるすべての人のためにあるのだ。私たちは世界平和とこの世から戦争をなくすために力を尽くそうではないか。

■アジア

■ネパール

青年招へい事業と日本社会

ミタイ・ラル・ハリジャン
(教育(学校保健)グループ)

世界の友好を深めるために、日本政府・JICAとネパール政府との協力による青年招へい事業は実に素晴らしいプログラムだ。ネパール人と日本人同士が同じ課題について語り合う合宿セミナー、ホームステイ、また日本の様々な伝統文化、歴史名所の見学、社会施設視察等、このプログラムは日本についての重要な情報を得、両国民間の美しく、深く、強い絆をつくるものであると確信した。

プログラムを振り返って思うに、日本は礼儀を教育する学校である、と言っても過言ではないだろう。どんなことでも真の体験とは、幅広い勉強と実践によってのみ得られるものである。私たちは日本と日本人について、本やマスメディアを通じて確かな情報を得てきたが、このプログラムによって、日本の現実を理解する機会を得、日本人の特質である礼儀を重んじる心、文化の美しい香りをも知ることができた。

日本の先端技術、男女平等、時間の使い方、仕事に対する責任感、来客へのもてなし、古い物を大切にする心、歴史、文化、自然遺産の保護等が心に残る。清潔な環境も称賛に値する。私の専門は保健教育なので、一連の視察を通じ、学校での清掃活動、必修の保健授業、栄養バランスを考えた給食等についておのずと関心が及ぶ。優れた体育の授業も、健康管理を徹底させるのに大きな役割を担っていると思う。

私は一人の教員として、ここで得た経験をネパールの現状と現地で入手可能な材料と手段を元に、地域社会と国の発展のために生涯努力してゆくつもりである。フランス革命を機に生まれた世界友好の思想は、日本に完全に根付いている。青年招へい事業に参加する世界各国の青年が、この純粋な志を持ち帰り、各々の国に広める決心をするならば、世界平和への努力の足跡を一歩一歩進めることができると思う。プログラムを変化に富み、楽しく、効果的にするため、日本の各分野の関係者による合宿セミナー、交流の夕べ、スポーツ交流、地方での歓迎会、ホームステイ、ボウリング等の活動を通じ、両国の文化と礼儀について互いに情報を交換し、理解を深めることができたことは大きな収穫だ。こうしてこの事業による両国の友好も更に深まるであろうと信じる。今回参加するにあたっての主な目的である公衆衛生と保健教育のメッセージを、私の学校、地域社会、そして母国へ広めることを約束する。

■アジア

■パキスタン

日出づる国、日本

アラム・ゼブ・ハーン
（地方行政１グループ）

日出づる国、日本。技術だけではなく、豊かな文化にも恵まれた国。この訪問は、私たちに日本の文化、社会、生活そして行政組織を学ぶ素晴らしい機会を与えてくれた。初日から私たちはあふれる日本の魅力に心を奪われ、まるで夢の国に踏み込んだ気分だった。

まず、日本の行政の三本柱、国会、都および県そして地域の行政を学んだ。一連の行政機関、また関連機関の訪問や、講義はとても興味深く、有益な情報に満ちていた。富士山がその影を投げかけるふもとで行われた合宿セミナーでは、たくさんの友情を育んだ。プログラムに花を添えてくれた静岡の滞在は、私たちの心に長く残る思い出となった。ホームステイで体験した日本の家庭生活も、私たちの人生においてかけがえのない体験となるだろう。お茶席、また和服への挑戦にも興奮させられた。

広島滞在中に私たちは、核兵器のもたらす悲劇を実感し、地球上からの核兵器根絶への祈りを駆り立てられた。

私たちの日本滞在は、多くの日本人の優しさの上に存在していた。そして、この友情は次第に大海よりも深く、富士山よりも高くなることだろう。

プログラムは、あらゆる面で時間配列、運営共に良く練られており、素晴らしいものであった。

日本人と日本文化の理解を深めた経験

アシム・イムダッド・アリ
（地方行政２グループ）

プログラム中、最上の経験は北海道滝川市での滞在だった。私たちのグループが東京を発って北海道に向かう前、いろいろな人から「遠く離れた凍てつく寒さの」島について聞いていた。しかし、北

海道を訪れて、何よりも衝撃的だったのは、開発が全国ひとしなみに進んでいることだった。滝川で最も狭いアパートであっても、小さな寺院であっても、日本海に面する小樽においても、東京の銀座の住民と同じ生活水準が保たれているのだ。

青年一人一人の心に長く刻まれるであろう、もう一つの側面は、私たちが訪れたどの地においても、そして特に滝川で、私たちに示してくださった日本人のもてなしの心と温かさだ。私たちは降り積もる雪のため、コスモスの花を見ることはできなかったが、滝川の人々の表情にその美しい彩りを見ることができた。北海道を訪れる前、私たちは日本という国の強さ、そのシステム、経済、民主主義を見てきた、しかし、北海道とそこに住む人々の中に、私たちは、礼儀正しさと温かさに満ちた日本の神髄を見ることができたのだ。

私たちは日本の成功の裏にある大きな要因は明治維新以降135年にわたる人材開発への集中的投資であると感じている。日本の大きな柱である、経済、民主主義、そして文化的伝統を強化してきたのは、まさに、教育の行き届いた、高い技術を持った、日本の人々にほかならない。

■アジア

■スリ・ランカ

第六中学での経験

ウィジェクーン・ヘラス・ムディヤンセラゲ・アヤンティ・サムドラ・ウィジェクーン
（理数科教員グループ）

青年招へい事業で多くの経験が得られた。なかでも長野県上田市のプログラムが最も大切なものとなった。そこでは第六中学校を訪問する機会に恵まれた。それはとても貴重な体験だった。なぜなら、仕事に役立つ多くの事柄を学べたからだ。この日は中学１年生の理科の授業を見学することができ、新しい教授法をいくつか修得した。私たちが学校に到着すると、生徒はスリ・ランカの国歌を演奏してくれた。その後生徒たちが日本の文化紹介をして、私たちは日本社会と文化をより深く理解することができた。校長先生は、私たちに生徒と一緒に自由に校内を見学する機会を与えてくれた。生徒と意見交換をしたり、“折り紙”などを一緒にしたりした。校長先生をはじめとする職員の皆さんも私たちのためにいろいろ尽くし、校長先生は日本の教育だけでなく、日常生活に関する重要な事実を教えてくれた。帰国してから、学校で生徒と一緒に、このプログラムで学んだことを活かしたいと思う。

最後にこの素晴らしい機会を与えてくれたJICAと長野県世界青年友の会に感謝の意を表したいと思う。

■アジア

■モンゴル

白い心

ナラントヤー・ワンダン
（地方行政官グループ）

日本人の心は白いミルクのように清く
日本人の大切にするお米は白く
日本人の崇める山の頂は真白く
日本人の愛する花の色は白い

モンゴルで初めて会った日本人、紀子さんに連れられて
我らモンゴル青年は島国・日本にやって来た
我らを兄弟のように
いらっしゃい、学びましょう、
努力しましょう、交流しましょうと呼びかける
JICAをはじめ皆さんの目に「白い心」がはっきり見えた

国民大衆に仕える公務員の奉仕は白く
国の発展のために働く人々の行いは白く
ボランティアの人々の微笑みは白く
ホストファミリーの美しい気持ちは白い

ありがとうと心から申し上げます
皆様の御多幸を心からお祈り申し上げます
(注：モンゴルでは白が最も尊ばれる色)

■アジア

■アルメニア

イロイロ　アリガトウゴザイマシタ！

ハルチュン・トルチキャン
(コーカサス混成 経済１グループ)

まず、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジアからなるコーカサス混成経済１グループの参加者を代表して日本政府、JICAの職員の皆様に対し、今回のような素晴らしいプログラムに招へいしてくださったことを心よりお礼申し上げます。日本の方々との交流、文化、経済に触れ、そして様々な企業、団体を訪問することができた。また名所旧跡の見学、ホームステイのファミリーや合宿に参加して日本人青年と友情を結んだことはよい思い出となった。

このプログラムは日本人の方々との交流のみならず、コーカサス、中央アジア諸国の友人たちとの交流を深める大きな可能性も与えてくれた。私たちはこれから文通などをして交流を続けていこうと考えている。私たちはコーカサスと日本の橋渡し役となっていくつもりだ。プログラムは大変充実しており、実り多いものだった。私たちは日本と日本の人たちの最高の思い出を持って帰国することができる。きっと常に日本の友人たちのホスピタリティーを思い出すことだろう。

日本の皆さんが私たちにしてくださったことのすべてに、「ありがとうございます」。

■アジア

■アゼルバイジャン

青年招へい事業について

エティバル・アブドゥッラ・アブドゥッラエフ
（コーカサス混成 経済２グループ）

私たちアゼルバイジャンのグループを青年招へい事業に参加させてくださった、日本国とJICAに対し、深い謝意を表したい。このプログラムで、私たちは、日本について、日本の若者について知ることができ、日本文化に触れることもできたのをうれしく思う。

日本滞在中、私たちは様々な町や名所を訪れた。また出かける先々で、日本人の友人ができたのは、プログラムの中に日本語学習を入れていただいたおかげである。

このプログラムは成功裏に終わったと思う。重ねてJICAにお礼を申し上げたい。

これから友好関係のみならず、日本とアゼルバイジャンの経済上の交流も、ますます深まることを祈っている。また近い将来、JICAの支所がアゼルバイジャンに開設されることを切に願う。そのことが、日本とわが国の交流関係をよりスムーズに築き上げると思うからである。

■アジア

■キルギス

文化を通しての相互協力

ジャマルベク・ツルグンベコフ
（中央アジア混成 経済１グループ）

プログラムの参加者は日本に来るまでに、何らかの日本に対する想像を抱いていたと思うが、ほとんどが経済や産業に関することで、日本人の生活、文化や生活習慣についての情報は十分ではなかったといえる。これに関連して私が特に強調したいのは、両国間の協力や相互理解は、ごく普通の国民同士が互いの文化を高め理解し合い、密な交流が行われる過程で生まれるものであるということである。確信していえることは、このプログラムは中央アジアと日本の様々な年齢層、各々の見解を持つ代表者たちの関係を今後ますます発展し深めていくというアイデアを実現するために必要とされるものである。

私たちの日本青年、日本国民、その文化やメンタリティーについての知識はかなり深まったといえる。たくさんの新しい友人を得ることができ、今後有意義なパートナーシップを広げていくためのアクションを起こすにあたり、期待が持てる。このプログラムは有意義な協力関係を築くために必要ないわゆる「民間外交」という概念を実現する礎となった。

青年招へい事業に参加して

ゾイルジョン・ヒクマトゥラエヴッチ・ジェドゥロエフ
（中央アジア混成 経済２グループ）

今回の青年招へい事業は、成功したと思う。参加者はそれぞれ世界をより多く知ることができたし、自分の知識や経験を磨き、友情の地図を拡げることができた。プログラムの個々のパートは、私の考えではユニークで興味深いものだった。プログラムは全体として高いレベルで編成され、素晴らしいものだった。

今後JICAにお願いしたいのは、プログラム参加候補者が、自国で、できる範囲内で事前の準備を行えるようにして欲しいということである。またプログラムは、青年たちの友好を深めるためのものなので、今後はもっと多くの交流、合宿セミナー、日本青年とのディスカッションを適時組み入れていただきたい。この点で私は、自由時間と国際交流の場の時間をもっと増やす必要があると思う。また、ホストファミリー先で参加者が自分の同年代の人と暮らせたら、ホームステイはより効果的で有効なものになるだろう。日本語の授業は大変気に入った。できることなら、プログラム終了まで、つまり1カ月間の間、定期的に行われたら、なお良かった。

青年招へい事業の実施にご尽力いただいたすべての皆様に、深く感謝の意を申し上げたい。プログラムは十分な賞賛に値するものだった。

■太平洋諸国・地域

■パプア・ニューギニア

日本雑感

リディア・カイア
（教育グループ）

初めて見た日本は美しかった。

力強く輝いていて想像以上のものを持っていた。

美味な料理、独特の文化と伝統は私を魅了した。

4週間滞在し、様々な場所を訪問し、様々な人々と会い、毎日が発見の連続であった。

私は日本について限られた知識しか持っていなかった。繁栄した忙しい国だから、工業化され公害もひどいと思っていた。人々は生活水準が高く、高価な趣味や嗜好を持ち、高い物を身に付けていると思っていた。

4週間の滞在後、私の認識はすっかり変わった。日本人にとってなぜ時間が大変重要なのか分かったような気がする。生活水準がその人の階層を表しているということも知った。

日本人はとても行儀がよく、礼儀正しく心温かくて、私の国と私自身に多大な興味を抱いてくれた。

驚いたことに、最先端技術の中心となっている国なのに、人々は夢想的ではなく現存の文化をとても大切にしていた。

私は日本に来て新聞記者としての視野を広めることができた。

第三世界の国からやって来て、日本のような発展した国の様子を垣間見られた。

いろいろな所から様々な背景を持ってやって来たパプア・ニューギニアの教員たちにとって日本はとても身近な存在だった。

私自身、今まで全く未知の分野だった「職業・技術教育」について目が開かされ、その重要性を理解し、とても貴重な体験ができた。

今や私は、日本とパプア・ニューギニアの職業・技術教育を比較し、その違いを述べられるまでになった。技術教育の普及に努めたいと思う。

日本に来て、私は他人を尊重し思いやることも徐々に学んだ。

この青年招へい事業に参加し、私はパプア・ニューギニア人、そして新聞記者としての自信を深めることができた。

このような機会を与えてくれたJICAに感謝する。

日本に触れて

ジャクリーン・カピゲノ
（地域振興グループ）

手のひらは汗ばみ気持ちはどきどき。私の思いは数千キロの彼方に、そして飛行機が新東京国際空港（成田空港）に到着する１時間前が恐怖であった。

JL768便で太平洋上空を東京に向けて飛行中、「これから日本に足を踏み入れる」との考えは余りにも強烈すぎた。学校で日本のことは学んでいた。日本についてはたくさんのことを知っていると思っていた。日本は先進国であり、コンピューター時代のリーダーであり、恐るべき強国でありと考えていると、成田空港に降り立った時、私は卑屈になっていた。

私の目に映った光景は想像以上だった。無数の高層ビルが空を埋め尽くすべく林立し、緑の木々ははるか下で残された空間を得ようと凌ぎをけずっている。

最初に非常に感銘を受けたのは、日本の労働者は効率よく働き、日本人だけでなく外国のお客様に対しても一様に尊敬の念を持って接していることであった。私の心配は、親切な日本人に会うたびに徐々に薄れてゆき、心を開いて討論し友情を深めていった。

東京、大阪、広島で過ごした時間はいつまでも宝物として私の心に残るだろう。現場見学、講義、合宿セミナー、交流、ホームステイなど素晴らしく、体験する価値のあるものであった。この体験は、日本のこと――文化や経済――をもっと知る助けになった。この旅行で、私にとってのハイライトは、神奈川県相模湖での合宿セミナーで、パプア・ニューギニアと日本の青年が友情の絆を結んだことで、いつまでも忘れないだろう。世界平和を希求する日本人の努力を思う時、広島はいつも私の心に平和の鐘の音を響かせてくれる。

私の全体としての印象は、日本人の一人が私の同僚に話したように、発展し過ぎた日本ではあるが、西洋文化の氾濫にもかかわらず、日本の伝統や文化がそのまま守られているということである。

日本人の私への敬意と日本人との友情の固い絆はいつまでも続くだろう。言葉の問題にもかかわらず、日本人は大変親切で彼らなりの方法で助けていただいた。４週間の日本滞在は、日本について多くの新しいことを私に教えてくれた。

東京、大阪、そして広島でお会いした日本の皆様、よいお仕事をお続けください。

パプア・ニューギニア地域振興グループの15人を代表し、この旅行を成功させてくださった日本の関係者の皆様に心より厚くお礼申し上げたい。私たちは決して皆様を忘れない。皆様の歓待や友情は私たちの宝物であり、日本を大変魅力的な国と印象づけるものである。

どうもありがとうございました。さようなら。

■ 太平洋諸国・地域

■マーシャル諸島

青年招へい事業

ジュニア・キオナ・ラリモ
（太平洋混成 環境保全グループ）

太平洋諸国の青年たち（環境保全グループ）を代表して、この来日を大変思い出深いものにするために、多大な努力をしてくださった方々に対して、心よりお礼申し上げます。また、日本の方々、日本政府とそのリーダーシップに関して、感謝申し上げます。皆さん方は、私たち、太平洋諸国の人々のために、大変多くのことをしてくださった。この青年招へい事業は、本当に私たちの一生を変えるような、生涯忘れることができない経験だった。このプログラムのおかげで、私たちは日本の人々や

その文化を、独特の方法で理解することができた。同様に、日本も、私たち太平洋諸国と共通の社会的、環境的問題を抱えていることが分かった。私たちは、日本の方々とお互い意見を交換し、考え方を分かち合うことができるよう、努力した。日本の方々も、今後、私たち太平洋の国々や人々について、より広く、かつ深い視点から理解してくださることを期待する。また、このプログラムによって、両地域の友好関係がより強力に、かつ親密なものとなることを望む。

終わりに、日本は今日、その技術力で最高のリーダーであるだけでなく、環境保全においても世界一である、ということが分かった。今回のすべての体験から、日本は疑いなく、自然を敬い、環境を保全しているということが分かった。その点に関して、敬意を表したいと思う。

どうもありがとうございました。

■ 太平洋諸国・地域

■ミクロネシア

日本のミクロネシア人

ネナ・トレノア
(太平洋混成 経済開発グループ)

昔、といってもそう遠くない昔、一人のミクロネシア人が日本という国に招かれた。

一世一代のチャンスを活かすべく、そのミクロネシア人は日本の歴史・文化遺産を見学し、現代生活を満喫し、科学技術と社会経済面の発展について学ぼうとした。

日本に来たのは初めてだったので、ミクロネシア人は驚きの連続で、時々自分をつねって夢ではないことを確かめなければならなかった。彼は初めて職業人としての自己に目覚めたのだった。

ミクロネシア人の最大の関心は、日本がどうやって最新の科学技術と文化遺産を共存させているかという点だった。先進国の日本で科学と伝統が相互補完の関係を保っている事実に、彼は感心した。

妊娠した女性とサングラスをかけた人が少ないことにもミクロネシア人は気づいた。

友情を築いた多くの人々と別れなければならない頃、ミクロネシア人は日本とほかの太平洋諸国について理解と愛着を深めていた。

二度とないこのような経験のおかげで、ミクロネシア人はそれまでずっと当然としか思っていなかった多くの事柄に感謝の念を抱くようになった。

故郷である熱帯の楽園に帰る前に、ミクロネシア人は青年招へい事業にかかわってくれたすべての日本人に心から感謝の意を伝えたいと思った。

後ろ髪を引かれる思いで、彼はつぶやいた。

「いろいろありがとうございました」

■ 太平洋諸国・地域

■パラオ

短いけれど忘れられない思い出

ルル・テチュール
(太平洋混成 社会開発(保健医療)グループ)

国の代表としてしっかり役割を果たせるだろうか。日本到着まではとても心配で、ずっと自分に問いかけていた。たゆまない努力、コーディネーターの助け、そして機敏な行動を心がければきっとうまくいくと気づいた。時間厳守と効率的な時間の使い方が、日本滞在のキーポイントなのだ。

このプログラムで、私だけではなく、全参加青年それぞれが、それぞれの専門分野において、より深い知識を得られたと確信できる。実に多くを学んだ。そしてそれらすべてが、今後自分の職場に限らず、家庭でも役立つものと思う。帰国後、職場の人々と分かち合える、効果的なプログラムや組織の運営方法や教育活動の促進方法等、このプログラムで多くの新しい視野が開けた。ホームステイでの日本の日常生活の体験は、大切な思い出となるだろう。日本人の誠実さ、礼儀正しさ、寛大さは、いつまでも私の心に残り続け、家族にも伝え続けられるだろう。以前は、日本は不思議な国だった。しかし今、日本人はベストを尽くし、強調し合うことを重んじる人たちだから、今の日本があるのだと知った。そして、これこそ多くの国々が学ぶべきことなのだろう。日本人は、自分のためだけに行動するのではなく、他の人々のことも考えて行動することも学んだ。

日本滞在の機会、日本の人々や文化、生活様式を知る機会を与えてくださったJICAおよびプログラム関係者の皆さんに感謝の言葉をここでもう一度述べたい。この滞在は、生涯忘れ得ぬ思い出となるだろう。ありがとう。

■アフリカ

■ベナン

日本滞在：学ぶべき態度

ソッサ・シャルル
（アフリカ混成(仏語圏) 保健衛生グループ）

JICAの招へいにより、2001年９月４日から10月２日まで、日本に滞在する機会に恵まれた。その滞在から得た幾つかの教訓を記述する。

世界的に勤勉であると言われている日本人は日常生活でも必ず約束を守る。この態度は国の発展に貢献すると思うし、アフリカでも約束を守ることに重きが置かれるべきである。特に日本人は時間厳守であろうとすることがとても大切であるように見えた。私と交流した日本の人たちが「時間は無限にあるものではなく、しかも無駄にしたくない貴重なもの」と教えてくれた。国の発展という観点から見て、アフリカはこの点遅れているし、アフリカ人は時間をもっと有効に使い、そして時間に対して厳しくなるべきである。時間を守ろう！

次に日本人はとてもきれい好きである。３日間のホームステイや研修を通して感じたことだが、清潔好きはどうも家庭内で生まれたようだ。その結果、日本人は向上心が強く、上質を求めるのであろう。

最後に犠牲的精神が素晴らしいと思ったことがある。橿原市で見た光景だが、高齢者のボランティアの団体が道路を掃除している姿には感動した。アフリカ人である自分は、祖国を愛するとはこのようなことから始まるのだと、目を覚めさせられた。彼らのように年齢に関係なく、私たちが自ら模範として始めようではないか。

時間を上手に使おう。生活の場を清潔に。精いっぱい働こう。

これらが日本から学んだことである。アフリカでも実行不可能ではないはずである。さあ、始めようではないか。

■アフリカ

■ナミビア

日本に来てみて

サラ・フランジ・ビワ
(アフリカ混成(英語圏) 女性教員グループ)

日本に来る前は、高度に発展した世界第一級の国なので、物はとても安く買えるだろうと思っていた。来てみて、何もかもが高価なのでびっくりした。最初は、いつも買う前に値段を換算していたが、これはうまくいかないと分かった。ただ、買うか、買わないかのどちらかだ。

アフリカの私たちの政府と同様に日本政府は教育を大切にし、共に政府は教育を優先し、小学校の教育は無料で義務づけられていることが分かり、体験した。学校での問題の中には私たちと同じものがあり、教育者として私たちは世界の未来を教育するという共通の目標がある。この目標達成のために私たちが結束し、世界を私たちみんなにとって住みやすくすることである。

日本で多くのことを学んだのでホームステイで使ってみた。時々は座ってお互いに見つめ合うこともあったが。手話は身体障害者だけが使うのではないことを証明した。お寺を訪れて、私は日本の文化の豊かさを理解した。

相互の信頼と友情を通じて調和を見いだそうというのが私の願いである。

■アフリカ

■セイシェル

青年招へい事業　2001年

ジーン・メルダ・ローラ・ピレイ
(アフリカ混成(英語圏) 保健衛生グループ)

日本の若い人たちと年長者との関係は温かさに満ちており、それが文化と伝統に表れている。この温かさは、将来の世代にも大切に引き継いでいって欲しい。

日本で、医療関係者が協力して、保健衛生の水準をさらに高度にしようと取り組んでいる姿勢を見ることができたのは大変良かった。また製薬会社で、薬の製造工程を見学できたのも参考になった。

史跡見学からも多くの情報が得られ、なかでも広島平和記念資料館は最も心を打たれた。過去に原爆投下があったにもかかわらず、次世代の人々は高度に発展した都市をつくり上げていた。

JICA、OFIX（大阪府国際交流財団）のスタッフはじめ私たちの日本での滞在を有意義にするために尽力してくださった方々に心よりお礼を申し上げたい。

■アフリカ

■トーゴ

日本人のホスピタリティー

モゴレ・アルズマ
(アフリカ混成(仏語圏) 理数科教員グループ)

知らない場所を訪れる者は皆、どのようなもてなしを受けるのかと思い悩むものである。JICAにより日本政府から招へいされたアフリカの若手教員である私の場合もそうであった。

しかし、大阪で初めて日本人に会った時、既にこの不安は一掃されてしまった。日本人のホスピタリティーは敬意に基づいているということが理解できた。

都内、特に相模湖の合宿セミナーでは、日本語学習の甲斐もあり日本人青年との交流ができた。椅子取りゲームに始まり日本式のお風呂に入るまで、同じ家族の一員として生活する喜びを共有することができた。

私のホストファミリー、杉田育穂さんのお宅では本当に大歓迎された。家族ともすぐになじめ、一緒に史跡や観光名所を訪れた。毎食おいしい日本料理を出してもらった。津山を発つ際は、別れのつらさで悲しくもあったが、また忘れられないような歓待を受け、心が満たされる思いがした。

つまり、ホスピタリティーとは日本文化において美徳の一つであるということを滞在中、生きた体験として理解できた。これこそ、この素晴らしい国民、そして世界全体にとっての本当の豊かさである。

■アフリカ

■テュニジア

アジアの真珠

アウイニ・ハミダ
(アフリカ混成(仏語圏) 女性教員グループ)

貧困の削減をめざして発展への努力を続ける開発途上国の切望に応えて、JICAは長年にわたり、これらの国々を支援してくれている。今回、私が参加した青年招へい事業もその活動の一環だ。

このたび来日し、日本の社会文化を知るまで、日本は、私にとってアジアの発展した国というにすぎなかった。

しかし、大阪で日本のボランティアの人たちと外出し、秋田でホストファミリーの家庭に滞在し、千葉の合宿セミナーでも日本人と交流したことにより、日本の本当の顔（文化の豊かさ、良質な教育、さらには、青年の抱える問題）を間近に見ることができた。

また、教育施設を訪問し、日本の児童生徒・教員と交流を行ったことにより、多く学ぶことができた。なかでも、私は、日本が、文化の衝突も、世代間の確執を生むことなく、自国の青年たちに立派な教育を授けることに成功した理由を知ることができた。それは、コンピューターを利用した教育、放課後のクラブ活動、自然の中での遠足、家庭科の授業、生徒を評価するシステムによるものだったのだ。

そして、秋田県海洋技術高校では、技術高校の典型例ともいえる大きな施設を見学することができた。自国でもこういった学校を建設し、創意工夫の心を持ち、仕事に熱意を持つ、ダイナミックな青年を養成することができればと考えた。

日本人は善意があり、また、良質の教育を受けているのだから、様々な分野で数多くのテュニジア人の養成を手助けしてくれるだろうと思った。

■アフリカ

■ウガンダ

皆一緒に

リチャード・コマケチ
(アフリカ混成(英語圏) 理数科教員グループ)

私たちは様々な思いを胸に抱いて来日した。日本の各所で歓迎を受けて感謝している。

体験的日本語学習、合宿セミナーで出会った日本人ボランティアの皆さん方とは、充実した時を過ごした。

教育関連機関・教育施設訪問では、教員に必要とされている数々のテーマの重要性を理解でき、また日本人が常に敬意を持って人に接しているということを知った。生徒たちの授業やクラブ活動、ボランティア活動への自主的な参加にも強い印象を受けた。

私たちを温かく受け入れてくださった、ホストファミリーの皆様との思い出は一生忘れられないものになった。

広島平和記念資料館見学で、平和を願う気持ちが炎となって胸にともった。

世界平和を願い、私たちを草の根から支援している日本を知った。私たちもさらに努力して前進しようと思う。

■ 中南米

■エクアドル

日本とラテンアメリカの共存と社会発展

クリスティアム・セバジョス・チャベス
(中南米混成(西語) 社会福祉グループ)

大阪、東京、青森、広島、京都の各都市は幾日もの間、総勢29人のラテンアメリカの青年たちを受け入れてくれた。私たちが生活しながら、日本の社会福祉、平和や発展について研修できるようにと、約１カ月にわたって日本社会は、家庭、学校、職場、寺院、スケートリンクなど様々な場所を提供してくれた。

JICAやその他関係団体による招へいプログラムのおかげで、私たちは、体験的日本語学習、日本語学習、ホームステイ、施設見学などを通じて、文化、倫理観、美的感覚、知識や日本の社会を形づくってきた（基盤となってきた）価値観について深く知ることができた。

どの研修先でも、人々は皆温かく好意的に私たちを迎えてくれた。

私たちを受け入れてくれた、都会の青年からホームステイ先のおばあちゃんまですべての人たちが生活の仕方を教えてくれただけでなく、なにより日本には友達がいると教えてくれた。

日本は地図の上ではとても遠い国だが、私たちが互いに分かり合えれば、心を一つにできるということが今分かった。

■ 中南米

■グレナダ

日本—刺激あふれる経験

エメラルド・E・ゴードン
(中南米混成(英語) 小中学校教員グループ)

万歳！コーディネーターたち。とても頑張ってくれた。JICAと日本政府もプログラムを誇りに思うだろう。日本への旅は真に刺激あふれる経験だった。

素晴らしい施設に泊まり、参加青年は個性豊かで愉快な仲間で、絶妙な雰囲気を生み出した。

プログラムは様々な内容がうまく選択されていた。日本、日本の人々と文化そして教育システムを学ぶのに最大の機会を提供してもらった。

食事も想像以上に素晴らしかった。個人的理由から口にできない食物が多いため、来日前はこんなに食事に恵まれるとは想像していなかった。食べられない料理、好きでない料理は確かにあったが、常に十分すぎるほどの食事が用意されていた。

訪問先は美しく、興味深く、目も心も引き付けられる場所であった。そして行く先々での人々の温かさ、親切心、歓待が訪問をさらに特別なものとしてくれた。訪問先に選ばれた都市はすべて素敵だった。滞在中試したゲームはうまく選別されたものであり、面白く、楽しさに満ちていた。

合宿セミナーは数ある最良の項目の一つであった。このプログラムには欠かせない項目であると確信している。日本人の青年にもセミナーの意義、役割に関する情報がさらに提供されるべきである。

ホームステイはすべてを兼ね備えた経験であった。良い面とそうでない面を知ることができた。非常に価値ある経験であり、文化や言葉の違いを再認識することとなった。

ここ日本での滞在は素晴らしい意義深い経験であった。消えることのない永続的関係の形成と思い出をくれた。この旅は日本と私たちの結束強化の始まりを告げるセレモニーであった。

■サウディ・アラビア

■サウディ・アラビア

サウディ・アラビア人の見た日本

ラーイド・サウード・コスティ
(マスメディアグループ)

サウディ・アラビア人にとって日本は未知の国である。高い技術力を有する経済大国として有名だが、それ以上のことは知らない。今回の日本滞在は、日本の文化、伝統、生活様式を知る大変貴重な機会となった。

日本では様々な発見があった。サウディ・アラビアでも日本でも、若者は同じような問題に直面している。就職に苦労し、残念ながら愛国心は薄れ、大人世代と衝突し、時に無鉄砲無責任な行動に走る。純粋で誠実な日本人の心を知ることもできた。日本人には西欧人が持つようなアラブに対する固定観念がない。人間を人間として尊重してくれる。

良くも悪くも西欧化された日本で、不思議なことに英語が通じない。言葉の壁こそ私が日本で唯一直面した困難だ。日本は今日、米国に次ぐ世界第二の経済大国である。西欧化が進んでも日本が米国文化に毒されないことを願っている。日本を米国の召使いのような国として思い出したくはない。

3. 合宿セミナー参加日本青年の声

“ワントーク”の友と

清家　弘司
(公務員：パプア・ニューギニア、地域振興(経済)グループ)

合宿セミナーからの帰りのバスの中、パプア・ニューギニアの青年たちに教えてもらったメグサの歌をみんなで合唱した。近づいてくる別れの時を惜しむかのように歌はいつまでも続いていた。

極楽鳥を国旗のシンボルとするパプア・ニューギニア、その青年たちとの交流を通じて特に心に残っているのは、彼らの自分の仕事に対する誇りと使命感である。同室だった教育企画官のジョーは、部屋に集まった私たちに、自国の教育制度について夜が更けるまで語ってくれた。

またディスカッションでは環境問題、特に森林破壊による地球の温暖化を、木材輸入国である日本と、輸出国であるパプア・ニューギニアの双方の立場から論じた。その際、パプア・ニューギニア政府の森林破壊防止に向けての積極的な取り組みを説明するハリーとジェリーは、自国の優れた政策を伝えようとする雄弁さに満ちていた。

もうひとつ興味深かったのは、“ワントーク”というものであった。日本語の「親友」という言葉以上の間柄であり、人間関係において絶大な力を持つものだという。ワントークの友人が来た時には最大限のもてなしをし、また困っていれば何をおいても助ける、という考え方は、核家族化が進み、隣は他人という日本の大都市では、もはや望めなくなっている点に一抹の寂しさを感じた。しかし、合宿セミナーに参加した私を含め多くの人が、遠く離れた国に“ワントーク”の友人ができたことは、一生の財産になると思う。

太平洋諸国の仲間たちの思い出

會沢　佳織
(医薬品分析評価員：太平洋混成、社会開発(保健医療)グループ)

私は太平洋混成社会開発グループとの合宿セミナーに参加した。始めは緊張していたが、バスの中でゲームをしているうちに緊張もほぐれた。ボウリング大会では、太平洋諸国の青年たちは初めての経験とは思えないほどじょうずなのに驚き、ゲームを通じてさらに会話が弾んだ。夜の懇親会での、太平洋諸国の青年たちの歌や踊りで彼らの国の海や島の美しさを思い浮かべることができた。日本の青年たちは、大正琴の「さくら」に合わせていけばなの実演をしたり、盆踊りなどを披露した。踊りにはみんなで参加し、一緒に楽しむことでお互いの距離が近づいたように思う。

ディスカッションでは、それぞれの分野の専門家としての意見交換を行い、医療問題への視野が広がり、私たちにできることは何なのかが分かり始めたような気がする。今後も微力ながら医療の質向上のために頑張っていこうと思う。

自分の時間を楽しく大事に生きるヒントをくれたフィリピン青年たち

辻村　絵
（会社員：フィリピン、行政(地方行政)グループ）

「今、この瞬間を、自分にできる限りの力で最大限に楽しんでしまおう。だって“今”って時はいつだって“今”でしかないんだから」

３日間の合宿セミナーのなかで、彼らからいつも伝わってくるメッセージだった。

フィリピンには、これまでに２度訪れたことがあるが、どのような場面においても共通して見られる、彼らのポジティブな姿勢やバイタリティーあふれる生き方に圧倒されつつも、感嘆させられることも多かった。

それは今回の合宿で出会った青年たちも例外ではなかった。前向きに生きることを彼らから改めて学んだ３日間だった。

経済的には発展した国である日本。そこから彼らは何かを学び取っていってくれたのだと思う。そして、それはお互いの国にとって少しでもプラスになるものだと思う。ただ、彼らとのかかわりの中で、経済指数だけが国の成熟度を示すものではない、と思った。

一生のうちで３日間というのが短いのかは分からない。でも別れ際、すっかり寂しくなってしまった私に、「これはさよならなんかじゃなくて、あなたと私たちの友情の始まりなんだ」と肩をたたいてくれた彼らのことは、決して忘れることはないだろう。

交流と社会福祉とこれからのこと

武藤　正浩
（公務員：ヴィエトナム、公務員(社会福祉)グループ）

合宿セミナーに向かうバスの中では、隣の女性と会話が続かなくて、会話集を片手にぎこちない会話しかできない。言葉の通じないもどかしさとゆっくり理解し合う楽しさを味わった。同室の３人からは言葉を教えてもらった。もっとも一人は恋愛関係のことばかりだったが。

交流会での彼らの衣装や踊り、そして穏やかな雰囲気と笑顔も魅力的だった。

社会福祉についてのとらえ方は、社会の状況によって随分と違うことを感じた。

「日本は豊かな国なのに社会問題がたくさんあるのか」という質問は印象的だった。児童問題では、ヴィエトナムでは貧困や児童労働が中心となっていたが、日本では虐待、引きこもり、犯罪が中心となっているのが大きな違いだった。

今回知り合えたすてきな仲間たちを訪ねたいと思っている。そして、もっとお互いのことを知り合いたい。

希望と夢と友情に乾杯

藤原　秀雄
（公務員：インドネシア、中小企業経営グループ）

宝物のように素晴らしい合宿セミナーに参加できたことに大変感謝している。インドネシアの中小企業経営グループの青年は皆個性豊かで、自分の信念をもっていた。彼らは前向きで優しく、生きることに貪欲であった。そして明るかった。それらは私に大きな刺激を与えてくれた。

インドネシアの青年たちと接して、私たち日本人は恵まれている、そしてそれに甘えすぎている面がある、ということに気づいた。人任せでなく、自分たちの手で社会を作っていかなくてはいけないのである。

また私は、かけがえのない友情を得ることもできた。日本とインドネシアの関係とか、民族間という大きなレベルではなく、個人として彼らとこれからも仲良くしていきたい。人と人が普通に仲良くしていけたら住みよい社会になると思う。

希望と夢と友情に乾杯。

海を越えた国際交流

久保田　裕美
(学生：カンボディア、農業(農村開発)グループ)

私は初めて合宿セミナーに参加したので、カンボディアの青年と２泊３日をともに過ごす中で、異文化に対する驚きが少なからずあるだろうと予想していた。しかし、いろいろな場面で同じような感覚を共有できたことに驚き、うれしかった。一人の人間として、言葉、生活習慣、環境などの違いを飛び越えて、カンボディアの人たちと共通の思いを感じられた体験はとても貴重なものだった。

交流の夕べでは日本の歌を一緒に歌ったり、カンボディア青年の踊りに日本人青年が入ったりと、いつの間にか全員が同じ輪になって、この合宿セミナーで初めて会ったとは思えない一体感を味わうことができた。

たくさんの情報社会の中で、偏った知識だけにこだわることなく、頭の中での壁を超えた交流をしていきたいと思う。

合宿セミナーに参加して

藤井　みずえ
(学生：マレイシア、教員(中高校教員)グループ)

２泊３日という短い期間だったが、マレイシアの国の事情をほとんど知らなかった私にとっては、とても意義ある合宿セミナーだった。

一番驚き、感心したのは、マレイシアの青年たちの強い宗教心だった。１日５回のお祈り、食べ物の制限など、私には耐え難いと思えるようなものでも、みんなが当たり前のこととして同じように守っていたのには大きな団結力のようなものを感じた。

日本とマレイシアは同じアジアの国だが、国柄は全く違う。そのような相手を理解するには、心を開き、相手をそのまま受け入れることが大切だなと実感した。お互いに学ぶことも多く、勉強になった。

行こうかな　君の住んでる　マレイシア

前田　高弘
(団体職員：マレイシア、農業グループ)

マレイシア青年との合宿セミナーには、上司に勧められ軽い気持ちで参加したが、マレイシアのことは全く知らないままの参加だった。しかしいざ参加してみると、マレイシアの青年は英語や日本語を上手に話し、合宿セミナーの期間中は楽しく過ごすことができた。実際にマレイシアの青年と話し

てみると、自分の国のことをいろいろ説明できることに感心した。こちらも同様に鋭い質問を受けたが答えられずに困ってしまった。例えば、47都道府県の位置や特産品をすぐに言えるだろうか。自分自身、日本という国への理解が足りないと痛感した。

交流イベントではセパタクローや伝統的な踊り、結婚式の様子などを紹介してもらい、一緒に楽しんでいるうちに、マレイシアの青年たちの親しみやすい人柄に触れることができた。いつかマレイシアに行ってみたいと思っている。

行こうかな　君の住んでる　マレイシア

グループ討論の発表で私が詠んだ俳句だ。

サウディの青年は敬虔かつ寛容

小川　秀樹

（大学院生：サウディ・アラビア、マスメディアグループ）

佐島マリーナで行われたサウディ・アラビアのマスメディアグループ青年との合宿セミナーに参加した。行きのバスの中からサウディの青年たちは大いに盛り上がっていた。到着した午後のスポーツ交流では、サッカーを行い、日本チームを一蹴。

そんな彼らも討論が始まると一変する。発表のたびに質問の嵐となる。交流会でも日本側との意見交換が続く。考えてみれば、マスメディアグループの彼らは相手から意見を引き出すプロなのだ。日本側もマスコミ分野からの現役記者を含め、現地経験者や地域研究者が集まっており、堂々と渡り合っていた。日本側メンバーも予想以上にタフな面々だった。

アジアのチャンピオンとしての日本を見る彼らの視線は熱い。そのサウディ・アラビアの世論形成の一翼を担う彼らが日本を訪れ、日本の専門家や若者と意見を交わす機会を持ったことは大変有意義なことだった。もちろん、私たちも日本にいながらにしてサウディ・アラビアの人たちと交流できることは同様に有益なことだろうと思う。

合宿セミナーに初めて参加して

菅　好弘

（公務員：インド、農業グループ）

私が合宿セミナーに参加したの初めてのことだった。

グループ討論では「男女平等・共同参画」がテーマで、インドの人たちから見て、日本の社会には男女差別がある、とのことだった。地方公務員という仕事柄、「男女共同参画」には常に意を用いているところだが、世界からはまだ認められていないことが分かった。

生活習慣や文化の異なる人々との交流は、自らの文化を見直すとともに新たな視点を学ぶことでもあり、この３日間は大変新鮮な感覚で過ごすことができた。

また機会があったら、ぜひ参加したいと思っている。

スリ・ランカ青年と過ごした２泊３日

吉田　美幸
（アルバイト：スリ・ランカ、理数科教員グループ）

初めて合宿セミナーに参加した。学生の頃から国際交流に興味がありJICAの青年海外協力隊については知っていたが、日本にいてJICAが招へいしている青年たちと交流できることは知らなかった。参加した３日間は有意義な時間が過ごせた。スリ・ランカの青年は想像していたよりおとなしく、人なつこい人々だった。ディスカッションでは、スリ・ランカと日本の生活、教育、文化の違いなど、みんな熱心に話し合った。スリ・ランカについて無知だった私は、彼らと交流したことで、国や人々についてもっと勉強したい、という興味がわいた。

バレーボールで盛り上がったスポーツ交流、お互いにダンスや歌を披露した交流の夕べ。すべてが忘れられない思い出となった。

合宿セミナーに参加して教育者として感じたこと

山岸　和佳子
（教員：ブータン／モルディヴ、教員グループ）

ブータン／モルディヴの青年との合宿セミナーに参加したのは、ブータン／モルディヴが未知の国であったこと、娘の恩師がブータンで初めての海外受け入れ演奏旅行に行った国だったことからだった。彼らに初めて会った時の、人なつこい笑顔のモルディヴの先生方、ブータンのやや緊張気味の先生方が印象的だった。険しい山々とインド洋の島々という国の違いはあるが、次代を担う子供たちの教育に熱心な様子が窺われ、頼もしく感じられた。学校訪問でも、授業参観や教育設備に非常に関心をもち、初めてのパソコンにも挑戦していた。

モルディヴは地球温暖化によりその小さな島々が沈みつつあり、日本を含めた先進諸国、そして私たち一人一人の生活を見つめ直させる教育をしていかなければならないと痛感した。

触れ合う中でこそ実感がある

岩島　典子
（保健婦：アフリカ混成(英語圏)、保健衛生グループ）

アフリカ混成(英語圏)保健衛生グループには、私と共通の職種の人が含まれており、相互の理解が容易で話も盛り上がった。アフリカ青年から、診療患者の90％がエイズ問題を抱えていると聞いて驚いた。恋人ができても、まずエイズの心配をしなければならないとは、私たち日本人が考えている以上に深刻で身近な問題だと実感できた。

日本文化は閉鎖的だと思っていたが、それがエイズの爆発的な広がりを防いでいたのかと、よい面にはたらいていたのかと見直す思いだった。

同じ職業でも、彼らはなんと重い責任と使命を背負っていることか。もっと彼らの状況に関心をもち、遠い国だからと思わずに友人の問題との認識が必要だと思う。私を通して彼らが日本に触れるように、日本の友人にも私を通してアフリカを知ってもらえるよう、今回の合宿セミナーでのことを友人に話そうと思った。

タイ青年との交流から芽生えた親タイ観

吉田　エリ
（大学生：タイ、教員グループ）

将来教員を目指している私は、海外の教師の方々との交流は教育に対する視野を広げられるよい機会だと思って、タイ青年との合宿セミナーに参加した。実際に参加した今は、考えていた以上に感銘を受けた。

２泊３日という限られた時間の中で、日本にいながら「タイ」という国の素晴らしさを感じることができ、親タイ観を持つことへの大きな一歩になった。

優しい響きやユニークな文字のタイ語、とてもカラフルで美しい民族衣装、情熱的で好奇心旺盛、とびきりの笑顔が似合うタイの人々……。タイ語、日本語、英語、と体全体を駆使しての意思疎通だったが、それでも心の底からの親愛の気持ちが育ったのは、寝食を共にして感性と感性が触れ合うレベルでの交流だったからだと思う。

帰国したタイの青年から「日本での温かい思い出を生涯忘れません。今度タイに来てくださいね」と電子メールが届いた。再会が楽しみだ。

ありがとう、そして、がんばれ！

石井　俊
（教員：中南米混成(英語)、小中学校教員グループ）

何を、どのように、そしてなんのために教えるのか。日々の仕事に忙殺されながら、このような疑問にとらわれることがよくある。同時に、このような不透明感そのものが現代日本の教育が抱える様々な問題ではないかとも思える。

教員の社会的役割は、よりよい方向へ未来の社会を導くことにある。未来の社会とはもちろん、子供たちだ。この仕事を担う私たち教員は、現状を正しく認識し、自己の価値観をより普遍的なものに高める努力を続けなければならない。その意味で、今回の合宿セミナー参加は非常に意義深かった。

「世界を変えるために」。ある青年の言葉だった。この言葉に私は強く触発された。

おそらく一生忘れられない言葉になるだろう。

みんなありがとう、そして、がんばれ！

友情は国境を超えて

粟　由希子
（公務員：中南米混成(西語)、社会福祉グループ）

とにかく充実した３日間だった。中南米青年と日本人青年との交流は、各国が、そして一人一人が、それぞれの個性を出し合っていた。この合宿を通して、「中南米の人々の魅力」を改めて実感した。

特に２日目の交流会は深夜にまで及び、日本に居ることを忘れてしまうほど、ラテン気分をみんなが満喫していた。また最終日の発表会は、各グループが団結し、各国の福祉事情を盛り込みながら、個性あふれる楽しい発表を行い、非常に感動的だった。

３日間という短くも濃い時間を互いに共有し、参加者の誰もが国境を超えて友情を育むことができた貴重な体験だったと確信している。

コミュニケーションの大切さ

多胡　士朗
（公務員：モンゴル、地方行政官グループ）

合宿セミナーに参加して、始めのうちは「言葉を理解することができるのだろうか」という不安があった。しかし、モンゴルの地方行政官グループの青年と出会い、「素敵な笑顔」と「物事に熱心に取り組む姿勢」を見て、不安はすべて吹き飛んでしまった。

私の中で一番印象に残っているのは、通訳の人がいない様々な場面で、お互いに身振り手振り、簡単な英語や日本語を交えながら行動を共にし、コミュニケーションを図ったことだ。一つのことを理解し合うのに非常に時間がかかり苦労があったが、その分お互いの距離は縮まったと思う。

モンゴル青年と過ごした３日間は、文化や歴史だけでなくいろいろなことを得ることができ、大変貴重な時間をもつことができた。今回、このような機会をつくっていただいた皆様に感謝している。

“理解と真心”による人のつながり

三村　正樹
（公務員：コーカサス混成、経済２グループ）

コーカサス混成経済２グループとの合宿セミナーに参加して感じたことは、人とのつながりを深めるには、相手への理解と真心が大事である、ということだ。セミナー２日目の夕食を、コーカサスの青年たちがつくってくれた。これは私たち日本人に、「自分たちの国のことをもっと理解して欲しい」、「ありがとう」という気持ちをこめた“真心”のごちそうだったのではないかと思う。

アルメニアとアゼルバイジャンの間では紛争が続いているようだが、夜、それぞれの国の青年たちがお酒を飲みながら語り合っている姿を見ると、お互いの理解と真心によって状況はよくなっていくのではないかと思う。

このほか、英語とロシア語での会話など、たくさんの刺激を受けた。これから自分自身も少しリセットして頑張っていきたいと思う。

4．ホストファミリーの思い出

ロンの置き土産

長谷川　佳代
（山梨県：フィリピン、中小企業経営グループ）

「ロン!!　レッツ・ゴー」とまるで大きなお兄さんをプレゼントされたかのように、２人の子供たちはロンを慕って一日中離れなかった。

わが家では初めてのホームステイ受け入れだったので、７歳と10歳の息子と20歳のロンとの交流がうまくいくかが最初は不安だった。しかしロンは、子供たちの片言の英語や仕草から気持ちをうまく感じ取り、一緒にオセロや将棋をしたり、雪だるまを作ったりと、兄弟のように遊んでいた。そんな姿からロンの優しさや前向きさが感じられた。

今回のホームステイの受け入れで、フィリピンの文化、生活など様々なことが学べた。しかしなによりも大きな収穫は、国際交流は人と人、心と心のつながりから生まれることを知ったことだ。そんな温かい置き土産を残していってくれたロン、ありがとう。

カレーパウダーとともに残してくれたもの

波多野　恵子
（岡山県：太平洋混成、経済開発グループ）

わが家にはフィジーのインド系の女性、シーマがホームステイした。お互いの言葉の問題で緊張し、最初のうちはうまくコミュニケーションがとれないでいたが、一緒に過ごす中で距離が縮まったと感じたのは、買い物に行き、チキンカレーを作った時からだった。カレーのスパイスを持参してきたシーマは、カレーを作るつもりだったのだと思う。

「タマネギは茶色になるまで炒めるの？」「どれが辛いスパイスなの？」「全部よ」

文法も教科書で学んだことも忘れて、会話をした。

カレーもインド風なら食べ方もインド式で！　ということで、母と私はシーマを手本に手で食べた。すごく辛いと思っていたら、まろやかな香り高いカレーだった。

「Very, very, very good」

そう彼女に伝えた時、本当にうれしそうで顔が輝いていた。スパイスの配合量などを聞き、次の日に早速、母がエビカレーを作り味見をしてもらうと、日本語で「おいしい」と言ってくれた。

別れの時には「泣かないで“Call thank you”と言おう」と、私を気遣ってくれた。この気持ちはホームステイを受けた者だけが味わう気持ちだと思う。

私たちのマチルダはストロング

小西　礼子
（香川県：パプア・ニューギニア、教育(職業・技術教育)グループ）

わが家の農繁期とホームステイの受け入れ時期が重なり少し不安があったが、パプア・ニューギニアから来たマチルダはライスフィールドをとても喜んでいたようだった。彼女は都会よりも郊外が落ち着くらしく、夫とともにジャガイモを収穫している時の顔は本当に生き生きしていた。またボウリング場では、初めてだというのに２ゲーム目にはまるで獲物を狙うハンターのように勇ましく次々とピンを倒していった。

常に積極的に接してくる彼女に、家中が華やいだ気持ちになり、「普段のままの私たちの生活を共に過ごすことに意義がある」という夫の言葉も納得できた私だった。

別れはとても切なく、名残惜しく、お互いに泣いてしまった。今日もマチルダのことを思っては、仕事の手がつい止まってしまう私である。

ミャンマーからの友

林　奈津子
（群馬県：ミャンマー、教育グループ）

私はアジアにとても興味があるので、ミャンマーの人をお迎えするのを楽しみにしていた。ホームステイ中はミャンマー料理を作ってもらったり、ロンジー（ミャンマーの民族衣装）と浴衣を交換して、写真をたくさん撮った。ミャンマーの料理は独特のスパイスを使った初めての味だったが、野菜とビーフンのスープは母の野菜スープの味に似ていて親しみがもてた。

日本とミャンマーの違いを話し合って、同じアジア人としていろいろ考えさせられる機会をもてた。予想以上に絆が深まって、今までになかった経験ができて幸せだった。幸運にも今年の夏、ミャンマーを訪問するので、現地で元気に再会できるのが楽しみだ。

夏を愛する男

松下　丈権
（愛媛県：インドネシア、農業グループ）

「ハーイ、パパさん！　こんにちは、ラビンです」

さわやかな声と笑顔で、初めて外国の人を家に迎える不安や気後れは、あっさりと散った。料理は口に合うかと心配する妻への「ノー・プロブレム」の一言で夕食の席は活気づき、地図を片手に彼の住む西ティモールでの生活や彼のお母さんのことなど、高校１年の末娘、妻、母はつたない言葉とジェスチャーで懸命に尋ね、答え、驚き、笑って夜が更けた。

翌日は炎天下での摘果作業に同行。サンダル履きの彼は、汗ひとつかかず、「夏を愛するひとは心強きひと……」と四季の歌を口ずさみながら急傾斜の畑を飛び回り、ミカンを味わい、農園の設備について質問したり、と自由自在である。

礼儀正しく、聡明で率直、小柄だが活発な、と明治時代に日本を訪れた欧米人が賞賛した日本人はこんなふうだったのかと、わが脚下を顧みた、彼との３日間だった。

ハディさん、ありがとう

大森　弘之
(愛媛県：マレイシア、教員(中高校教員)グループ)

ハディさんが連れてきたマレイシアの風がわが家に吹いた。

ハディさんが奥さんと一緒に見立ててくれた「サロン」をお土産にいただき、早速着てみる。筒型の布を腰にひと巻きして、気分はすっかりマレー人。

コンパスを使ってイスラム教の聖地・メッカを探しているハディさんにも興味津々。食事制限、お祈りのタイミング等々、ここぞとばかりに飛び出す質問にもハディさんは一つ一つ丁寧に答えてくれる。その言葉の端々に、自国の文化に対する誇り、自国の発展に貢献したいと願う熱意が感じられ、とても新鮮だった。

わが家に滞在中、ハディさんは「すもう」中継に釘付けだった。ハディさん、また一緒に居間に座って相撲を見たいね。待ってるよ。

アオザイの似合う美人ジャーナリスト

福田　信
(大阪府：ヴィエトナム、経済グループ)

明るい笑顔のニュンさんはスマートなジャーナリストだった。素直でよく気がつく礼儀正しい面と、理知的で才能豊かな面を併せ持つキャリアウーマンの雰囲気が感じられた。自由主義のもとでのびのびと自分の道を切り開いていく現代女性の力強さと、しっかり自己を確立した人間性に感心した。

仕事ではパソコンを大いに活用し、意欲的で、自分の専門分野に自信をもっていることが分かった。日本よりも女性の社会進出は進んでいるのかもしれないと思った。ドイモイ政策の進展で経済成長がめざましい中で、工業分野では競争が比較的限定されているのか、寡占状況にある場合が多いように思った。

才色兼備の彼女の未来に幸あれ！　と祈っている。

ヌーさんと過ごした３日間

高橋　恭子
(愛知県：タイ、地域振興(地域環境保護)グループ)

ヌーさんと過ごした３日間、トムヤムクンを一緒に作ったり、浴衣を着て“おいでん祭り”に行ったり、上高地でハイキングをしたり、とても楽しかった。でもこういうふうに思い出を書いてみると、何か少し物足りない。もっと違う、言葉では言い表せない“何か”があった。

一緒にいた時間が素晴らしかった。ほとんど言葉は通じなかったのに、家族のこと、好きな音楽、また専攻が同じなので勉強のことや将来の夢まで語り合った。父と母は、ほとんど忘れていたタイ語を少しずつ思い出し、ヌーさんがもっている雰囲気は、私と兄に子供の頃滞在したことのあるタイの薄れかけていた懐かしい思い出を運んでくれた。ヌーさんが私たちの家から日本のよい思い出をタイに持ち帰ってくれたらうれしい。

楽しい思い出をありがとう。

See you again.

木村　ひさえ
(埼玉県：ラオス、経済(財政)グループ)

わが家がホストファミリーとして外国の方を受け入れたのは２回目になる。前回同様、今回のラオスの女性も英語がたん能で、日常会話に留まらず、お互いの国の社会状況や文化、歴史などの一端を知ることができた。

私の両親や祖父母を敬う彼女の心遣いや行動には感心した。日本では核家族化が進んでいると聞いていたそうで、７人家族のわが家には驚いているようだった。

一緒に近所のお寺や動物園に行き、夜には浴衣を着て夏祭りに参加して盆踊りや神輿では近所の人たちとの交流の輪も広がった。彼女が料理を作ってくれて、食の交流もできた。

別れる時は大変つらいものだが、私も家族も素晴らしい体験ができてよかったと思う。

メルシー、アミナタ&エリーズ

佐々木　久美子
(秋田県：アフリカ混成(仏語圏)、女性教員グループ)

わが家にホームステイにきたアミナタとエリーズの２人は、とても明るく気さくで素敵な女性だった。フランス語圏の国からなのに、一人は英語の先生ということで、もう一人の方の通訳をしてくれながら２人分を英語で話してくれた。顔の表情や身振り、そしてこちらはつたない英語ながら何でも話し合え、心から分かり合えたと感じられた２泊３日だった。特にお国の男性上位の習慣については妻の立場でたびたび話題になり、わが夫婦を見て、「私の国に来て言ってやって」というようなことを言って笑ったり、「彼女が黙っている時はハズバンドを恋しがっているのよ」とユーモアたっぷりのおしゃべりで、国境を超えての主婦の井戸端会議に花を咲かせ、盛り上がった。日本もアフリカも主婦の気持ちは同じ、ということを感じ、アフリカとの距離がぐっと近くなったように思う。

大切なものを

筒井　里香
(京都府：ネパール、教育(学校保健)グループ)

ネパールからのお客様を、私たち家族は少しの不安と大きな期待をもって待っていた。

いよいよその日、車から降りた２人に会った瞬間、それまでの心配が消え、なんともいえない懐かしいような親しみを覚えた。

私たちは３日間、息子の幼稚園の運動会に参加したり、近くの浜辺や農道を散歩したり、夕食を一緒に作ったり、普段と変わらない時間を共に過ごした。また、家族のことから生活習慣、教育、社会問題に至るまで、様々なことを語り合った。私たちが言葉や習慣の壁を超えてお互いに通じ合えるようになるのに時間はかからなかった。そしてなにより、彼女たちの礼儀正しく、物静かで温かい人柄に感銘を受けた。それらは、日本人が大事にしてきたものでありながら、今失いつつあるものに通じる。だから会った瞬間、あれほどに親しみを感じたのだろう。２人は私たちに、大切なものをそっと置いていってくれた。今まで遠い国だったネパールが、今はすぐ近くに感じられるようになった。

素敵な笑顔をありがとう

工藤　美代子
（北海道：インド、農業グループ）

今回のホストファミリーの経験を通して、言葉の壁があっても心から大切に思う気持ちがあれば相手に伝わる、ということを改めて実感した。主人が出張で留守だったので、私と小学校６年の娘だけでだいじょうぶだろうかと、とても不安だった。でもブッピさんの笑顔を見た瞬間、私の不安は消えた。彼女は娘とトランプをしたり、娘の友達と一緒にカラオケに行ったりと、ずっと娘と遊んでくれた。彼女は料理がとても上手で、インドの料理を作ってくれた。私は今でも時々彼女を思い出しては作っている。

「あなたのことは忘れません。お別れするのが残念です」

私とブッピさんがお互いの国の言葉で書いて交換したものだ。

ホストファミリーの体験を通して素晴らしい方々と出会い、いろいろなことを学ばせていただいている。この経験は私の財産だ。

バングラデシュの友達

上田　江美
（愛知県：バングラデシュ、社会福祉グループ）

私たち家族にとって、今回は初めてのホストファミリーだった。私たちは、ホストファミリーはなんだか楽しそうだと思いこんだ。家に来たのは、リピというニックネームの女性だった。年齢は私より植えだが、可愛らしい人だった。彼女を一緒に数日過ごして、改めて人とコミュニケーションをとることの面白さ、大切さに気づいた。家族や同じ職場のメンバー、分かり合える友人と過ごしていた私にとって、「自分の気持ちを一生懸命伝える」ということ自体が新鮮だった。言葉は不十分でも気持ちは伝わるものだと思った。

彼女と過ごして一番楽しかったのは、一緒に料理を作ったことだった。普段見ることのないスパイスや木の実の入ったバングラデシュのチキンカレーはスパイシーで最高だった。彼女が自分の結婚式に招いてくれると言ってくれたので、実現することを祈っている。

わが家に素晴らしいプレゼント

川原　利雄
（鹿児島県：アフリカ混成(英語圏)、理数科教員グループ）

アフリカから川辺町へのホームステイの話を聞き「引き受けてみたい」と思ったが、私も妻も英語は全く話せない。それで近くの友人、ジェフを呼び助けてもらうことにした。

初日に自宅の風呂にガーナから来たマーティンと一緒に入りたいと思い、何度も彼を呼ぶがなかなかこない。それならばと、私は裸のまま彼の前に行き「カモン」と一言。これで彼も笑いながら来てくれた。黒い肌と白い肌の２人が背中を流し合う。遠い遠い国の人が今は、私の子となり弟となり友となって肌が触れ合うほど近くにいる。

次の日はみんなではだしになってイモ掘り。イモの貯蔵法と堆肥の作り方を話すと、彼は国の人たちに教えるとのこと。

もうそこまで別れの時が来ている。娘の結婚式以来涙したことなどなかったのに、また会えるじゃないかと思っても、涙が出てきた。

元気で、マーティン。グッバイ、マーティン。

チリの青年を迎えて

上田　博正
（神奈川県：中南米混成(英語)：小中学校教員グループ）

わが家に来た青年は大変まじめな好青年だった。スペイン語圏の人だが、英語が非常にうまく、言葉の面で全く問題もなく様々な事柄についてお互いの情報や意見の交換をすることができた。特に彼が興味を持っている禅宗や日本の歴史などについても、私は鎌倉のガイドをしているので十分に説明することができ、また円覚寺の座禅を見られたので大変喜ばれた。

彼は算数を教えているとのことで、公文式の教え方に非常に興味を持っていたので、書店で練習問題を何冊か求めた。また、家で折り紙を教えたらとても興味深そうだったので、折り紙の英語解説を買って差し上げた。

歓迎会で日本の伝統的なものを知ることができたのはよかったと思う。

普段の彼は、私たちと比べゆとりのある時間の過ごし方をしている人であることを感じた。

アストラ　ビスタ、マルタさん

笹　紘実
（青森県：中南米混成(西語)、社会福祉グループ）

私の家にメキシコからマルタさんが来た。夕ご飯のあとで、マルタさんがマリアッチという人形をお土産にくれた。その人形を見ていたら、どんな曲を演奏しているのか、聞いてみたくなった。

２日目は私の小学校に来て、スペイン語を教えてくれた。スペイン語を使ったゲームをしたあと、クラスのみんなは、マルタさんに手紙を書いた。マルタさんも喜んでくれて、私はうれしかった。

私はスペイン語はよく分からなかったけど、マルタさんがゆっくり言ってくれたので、分かるようになってきた。

今度会える時には、スペイン語でいっぱい話をしたいと思う。また私の家に来てください。

アストラ　ビスタ、マルタさん。　（小学４年）

中央アジアの友人Lyazzat

石川　りつ子
（北海道：中央アジア混成、経済２グループ）

中央アジア、カザフスタン？　ロシア語？　カザフスタン語？　にわか勉強をして、いよいよLyazzatに対面。私たちと同じ黒い髪、黒い目のチャーミングな女性だった。英語も話せる。服飾企業の社長ということで、ファッションに興味があるので振袖を着せてあげることにした。日本人以上に似合って、「オーチンクラシーバヤ！」。

わが家の地図帳で彼女の住んでいる町を探した時、４年前に遷都されたことを娘に教え、現在の首都アスタナを書き込んでくれた。Lyazzatを通して、独立からわずか10年のカザフスタンを垣間見ることができ、今回のプログラムに大変感謝している。冬季オリンピックを見ていても、カザフスタンの選手が出ているとつい見入ってしまう私たち家族だ。

ホストファミリーへの挑戦

斉藤　道一
（沖縄県：コーカサス混成、経済２グループ）

私たちは今回、ホストファミリーを勧められた時、消極的だった。しかし、いざホームステイが始まると、英語ができない私たちに分かりやすい言葉で話してくれたり、「僕がここに１週間いれば英語をマスターできるよ」と励ましてくれた。言葉の違いも分からない子供たちにも優しく接してくれたので、子供たちもすぐに打ち解けた。私たちは、言葉の壁を考えすぎていたことに気づかされた。

バレンタインデーが近かったので、それぞれの国での愛の告白の仕方の違いや、日本の“ひな祭り”はグルジアの“女性の日”に似ているところもあるなど、お互いの国の文化を話し合ったりもした。

慌ただしく過ごした３日間だったが、とても貴重な体験ができ、ホストファミリーを受けて心から良かったと思っている。お世話になったスタッフの方々、ホームステイに来てくれた“Zaza”に感謝している。ありがとうございました。

5. 実施協力団体の所感

プログラムを通し、青年たちに伝えたかったこと

大谷　和生
((社)青少年育成山梨県民会議：フィリピン、中小企業経営グループ)

山梨県には全国的に有名な研磨・宝飾、ワイン、絹織物、印章をはじめ、山梨の風土に根ざした様々な地場産業がある。そのほとんどは中小規模経営の企業だ。しかし、企業間の生存競争が激化する中で、それらの企業は現在独自の地位を築いている。これは各企業が日々創意と工夫を重ね、ほかでは決して真似することのできない“モノづくり”を行った結果ではないかと考えられる。

「ナンバー・ワン」ではなく、「オンリー・ワン」。

これはある訪問先で担当者が言った言葉だが、招へい事業の参加青年には、ぜひこの精神を学んでいただき、自国に帰った後、それを生かし、フィリピンの発展のために各々の分野で活躍して欲しいと思う。

備前の里に国際交流の風が吹く

武市　昌之
((財)岡山県青年館：太平洋混成、経済開発グループ)

今回の太平洋青年受け入れ事業もあっという間に過ぎていった。岡山県青年館が実施する青年招へい事業には２つの特色がある。ひとつは、できるだけ国際交流の行われていない地域でホームステイを体験してもらうこと。今回の備前市でのホストファミリー22軒のうち20軒が初めての体験だった。もうひとつは、国際交流を通じて地域の活性化を図っていきたいと考えている。国際交流の機会の少ない備前市では、今回の太平洋青年受け入れを通じて国際交流につながっている。例えば、ホームステイを受け入れた家庭や地域は、文化や習慣の違いを理解していったことである。備前市でもこの受け入れによって多くのことを学んだ。

受け入れ事業が終わり、太平洋青年たちのおおらかさ、家族やお年寄りを大切にする態度に接し、日本の家族が忘れかけている人への優しさと考えさせられた、いう感想が受け入れ家庭からあった。この青年招へい事業は、世界の青年と家庭生活を共有する体験を通して青年や彼らの国を理解することにつながっていると思う。

パプア・ニューギニア青年と小学生の交流

末澤　良幸
((財)香川県国際交流協会：パプア・ニューギニア、教育(職業・技術教育)グループ)

今回私たちは、パプア・ニューギニアから教育（職業・技術教育）分野の青年15人を受け入れた。パプア・ニューギニアからの受け入れは初めてだったので、最初は非常に緊張した。しかしその飾らない性格、明るい笑顔、誰とでもすぐ打ち解けようとする態度に接して、私たちの緊張もほぐれていった。

視察先の小学校やホストファミリーの方にも彼らは人気者で、小学校では生徒が青年を囲んで離さず、大きな腕にぶらさがったり、肩車をしてもらっている子供たちもいた。また学校がホテルの近くだったので、彼らの研修が休みの日には、何人かの青年が再び小学校を訪問したということだ。その小学校は100周年を迎えており、記念誌に今回の交流の模様が掲載されたようだ。

純朴なままの発展を祈って

太田　隆明
(NPO群馬県世界青年友の会：ミャンマー、教育(中高校教員)グループ)

私たちNPO法人、群馬県世界青年友の会は、2001年６月20日から７月7日まで、ミャンマーの中学と高校の先生20人を受け入れる地方一貫型プログラムを実施した。数年前、同様のミャンマーのグループを受け入れた時のように、今回も彼らの教育への熱意と自国の発展を願う彼らの気持ちは、私たちの心を強く揺さぶった。

社会の様々な問題に悪影響を受けている子供たちを指導する教員が大勢いる群馬県世界青年友の会では、ミャンマーの素朴な心を保ったままの発展を強く願った。私たちのプログラムのさよならパーティーでの涙を流した、あの純朴な心に、物質的発展が伴えば、ミャンマーは必ず素晴らしい国に生まれ変わるだろう。

23人のインドネシアの息子と娘たち

清家　恭子
(愛媛県青年海外協力協会：インドネシア、農業グループ)

インドネシアの青年たちの受け入れにあたっては、私自身初めての担当だったので、あれもこれも経験して欲しい、盛りだくさんのプログラムを用意した。猛暑の中、青年たちと研修先を回りながら、「これは少々過密スケジュールだ」と反省した。しかしそれぞれの研修先では、非常な熱意でもって準備万端整えて青年たちを迎えてくれた。青年たちは実に真剣に熱心に説明を聞いて質問し、研修先の担当者もそれに張り切って応え、いつも時間不足となった。おかげで移動時のバスの乗り降りにはいつも青年たちに「お母さん、早く、早く！」とせきたてられるはめになった。

彼らには、日本の農業発展の日の当たる面を吸収するばかりでなく、自然を守る大切さや、役人として働く時、いつも農業者を思いやる気持ちを忘れないで欲しい、と願っている。

マレイシア青年を受け入れて

八塚　優子
((財)愛媛県国際交流協会：マレイシア、教員(中高校教員)グループ)

今回は愛媛県国際交流協会として初めての地方一貫型の受け入れで、心地よい緊張感を持って臨めたと思う。「日本の素顔を見て感じてもらおう！」を目標として、地方ならではのプログラムづくりに努めた。地元の人たちと屋台船で楽しんだ鵜飼いの見学、翌日同じ川で行われたカヌー体験は大変好評だった。転覆して何人かが泳ぐということもあったが、笑いが絶えず、「この川のことは忘れない」と印象深かったようだ。

また、青年のサービス精神とバイタリティーあふれる歌や踊りは、各学校でちょっとしたマレイシアブームを巻き起こした。「あの曲に乗ってまた学校集会で踊りたい！」「ぜひ子供たちにも教えたい！」そんな声がたくさん挙がった。

長期のわたっての受け入れだったが、冗談好きで涙もろく、国と家族を愛する気持ちにあふれたマレイシア青年の顔が、一人一人はっきりと見えたことが最大の魅力だったと思う。

国際交流に目覚めた合宿セミナー参加者

田中　綾子
((財)太平洋人材交流センター：ヴィエトナム、経済(中小企業経営)グループ)

平成13年度の青年招へい事業で、私たちは初めて地方一貫型プログラムを受諾した。当然、合宿セミナーの運営も初めてである。しかし、その合宿セミナーで大きな感動を得ることができた。それは、その場限りの出会いではなく、いつまでも続きそうな関係を橋渡しできたことだ。

合宿セミナー後、ヴィエトナム青年との出会いの感動をいつまでも分かち合えるようにと、日本人参加者の中でメーリングリストが立ち上がった。現在までに50通ものメールが行き来し、その情報の中で、ほかの国やグループの合宿セミナーやワンデイ・ボランティアに参加した人もいる。一方で、ヴィエトナムに旅行に行き、帰国していた青年に会った人など、国際交流に目覚めた方がたくさんいて、実施した団体としてはうれしい限りだ。

来年もこのような感動が得られるよう、もっと研修プログラムを充実させたいと思っている。

青年招へい事業を振り返って

和田　岳世
(アステ［(財)勤労センター憩の家］：タイ、地域振興(地域環境保護)グループ)

アステ（(財)勤労センター憩の家）は、青年招へい事業の合宿セミナーへの職員の参加、豊田ボランティア協会の地方プログラムのホームステイ受け入れの協力と、長年にわたりかかわってきた。

分野別地方プログラム全体を受託するのは初めての経験だったが、国境を超えた仕事ができることをとても誇りに感じた。

この事業を成功させるために、関係団体や協力団体との調整を重ね、招へい青年に満足感を持ってもらえるようにプログラムの内容・配分に苦労した。関わる人たちの思いを最大限盛り込むことがこの事業の面白さの一つであり、成功のカギである。

今回感じたことは、タイ青年から学ぶタイという国の素晴らしさだけでなく、同時に日本の素晴らしさも感じることができたことだ。タイ青年も私たちも国境を超え、自国を再認識できる。この事業の成果は何年先に表れるのかは分からないが、この事業に携わった人たちによりお互いの国境を超えてもたらされるはずだ。その時がとても楽しみであり、もちろん私もその一人になりたい。

最後の、来日されたタイ青年、スタッフはじめ協力してくださった皆様に厚くお礼申し上げます。

受け入れの難しさ

加藤　滋之
（上尾市国際交流協会：ラオス、経済(財政)グループ）

プログラム８日目の昼食でのことだった。ラオスはタイの隣の国、アジアの国なのでだいじょうぶだろうと、カレーライスを昼食に出したのだった。ところが、食事が終わったラオス青年たちの皿を見て、がく然とした。なんと青年の９割が、ライスはきれいに食べているのに、カレーのルーには全く手をつけていなかったのである。後で聞いてみたところ、ラオスではカレーはあまり食べないとのことだった。私たちの安易な考えが失敗の元だった。

自分とは違う習慣の人を受け入れることの難しさを、このように「食習慣」でも感じ、ラオスの情報をもっと多く集めた上で、自分たちだけが満足することなく受け入れなければいけなかったのだ、と思い知らされた。

アフリカが近くなった

永井　勤
（秋田世界青年友の会：アフリカ混成(仏語圏)、女性教員グループ）

日本からはとても“遠い”というイメージのアフリカ。その遠いアフリカからお客様を迎える、しかもホームステイの地として。いわばこの秋田が、日本を代表してアフリカの青年たちと心と心の交流をするのである。

私たち秋田世界青年友の会では、ホストファミリーや各訪問先の方々と心と心の交流ができるように、短い滞在期間でできるだけ真の日本人の姿を感じてもらえるように、プログラムを組み、橋渡しをしたつもりである。その中で養護学校の訪問は私たちにとって初の試みであった。障害をもった子供たちと青年がうまく交流をもてるか……。私たちの心配は無用だった。子供たちの笑顔を笑顔で受け、応えてくれた青年たち。一緒に秋田音頭を踊り、いすとりゲームを楽しんでくれた。

人間ていいな。

帯広を訪れたインド青年

小笠　佳奈子
（十勝インターナショナル協会：インド、農業グループ）

今年はインドの農業グループの青年13人を受け入れた。青年たちの自国の発展にかける思い、切磋琢磨して物事に取り組む姿勢には頭の下がる思いがした。プログラムでは、農業を基幹産業として発展してきた帯広・十勝の特性はもちろん、おいしい空気や水、雄大な自然を十分たん能していただけたものと確信している。

また、ホームステイや合宿セミナーを通して、多くの日本人と交流したことが両国の相互理解と世界平和の一助になることを切に願っている。

インドは5000年以上の歴史と10億を超える人口を有し、聖と俗が融合した大変魅力を感じる国である。このたびのインド農業グループの帯広・十勝での研修がインドの農業の発展に寄与することを期待している。

ネパールからの先生

(財)京都ユースホステル協会
((財)京都ユースホステル協会：ネパール、教育(学校保健)グループ)

ネパール教育グループのほとんどは、小学校と中学校の先生方だった。青年たちは、学校訪問の際、子供たちを観察し、自分たちで掃除をしている姿にとても関心を示していた。青年たちは、自分たちの学校でもすぐにそのような習慣を取り入れることができるだろうと言っていた。

病気を予防するために最も効果的な方法は、その都度手洗いをすることだと彼らは教えられていた。しかし、それを実践することは、下水設備、ましてや水道も満足にない学校ではとても難しいことかもしれない。青年たちは、そのような厳しい状況の中、周りの人たちを教育し、地域の衛生面も指導していくという重要な任務に直面しているのである。

青年たちは、ネパールの首都までバスや徒歩で２日から３日ほどかかるくらい遠いところに住んでおり、そこで自然に囲まれて生活している。青年たちの素朴な性格は、そのような生活によるものに違いない。ホストファミリーをはじめ関係者全員が、青年たちの人柄に魅了され、日本人とネパールから来た若者との間に固い友好関係を築くのに大きく貢献した。

私たちは、この青年招へい事業が、それぞれの国同士の限られた情報交換だけに終わることなく、文化や人材の交流のきっかけになっていくことを望む。

バングラデシュ青年から学ぶ

都築　芳郎
((財)愛知県国際交流協会：バングラデシュ、社会福祉グループ)

私たちがバングラデシュの青年のために用意したプログラムは、受け入れ側の私たちのほうが音を上げてしまいそうなくらいハードなものだった。彼らに少しでも多くのことを学んでもらい、そして少しでも多くの人たちに交流の機会を、と考え、様々な内容を詰め込んだ結果である。私の一番の心配は、途中でプログラムについていけなくなる青年が出ることだった。

しかしそんな私の心配をよそに、バングラデシュ青年たちは常に明るく、好奇心旺盛でユーモアに富み、そして最後まで熱心にプログラムを遂行した。講義や訪問先では質問の時間がいつも足りなかった。彼らは出会ったすべての人々との思い出を心に刻みつけ、新しい知識をすべて吸収しようとしているように見えた。そんな彼らの姿から私自身が受けた刺激は大きく、教えられることが実に多かった。

彼らのような若者がいる限り、バングラデシュの将来は明るいと私は確信している。

温かい交流をありがとう

大迫　浩美
((財)鹿児島県国際交流協会：アフリカ混成(英語圏)、理数科教員グループ)

2001年秋、アフリカ15カ国の理科・数学の教師24人を迎えた。小・中・高校を訪問し、授業参観や交流会、給食の体験、着物の着付けや施設の視察、農村での３泊４日のホームステイ、祭りへの参加、と多くの人たちと交流できるようプログラムを作成した。高校では、飛び入りで教壇に立ち自国の紹介をしたり、あいている席に着き隣の生徒の教科書で一緒に勉強したりと、物怖じしない積極的な青年たちにあっという間に学校を占拠されていた。教壇に立つ姿は、さすが先生、と思わせる態度で、最も生き生きして見えた。

農村での祭り（収穫祭）では、町民の方たちが青年の作ったアフリカ料理を手で一緒に食べるシーンも見られた。餅つきを楽しんだり、青年の国の様子を聞いて「遠くからよく来たね」と握手した手を離さないおばあちゃんがいたりと、それぞれ心に残る交流をしていた。

ホストファミリーの「アフリカであれ、アメリカであれ、日本であれ、人の心は変わりなく、どんな遠い国でも近くにあると知った」という言葉が印象的だった。

中南米から青年を迎えて

山田　雅子
（鎌倉ユネスコ協会：中南米混成(英語)、小中学校教員グループ）

研修プログラムを組むに当たって、来日青年と同分野の方々との交流と意見交換が果たせるように市内の公立学校を中心に、教師や児童生徒との時間を多くし、授業や給食体験など、日常の学校生活を体験してもらった。来日する国の数が多いため、受け入れ側の児童に国に紹介をするだけでも国際理解の成果があった。

今日本の教育の現場では「総合的な学習の時間」の導入でその副題になっている国際理解教育に対する新たな取り組みが始まっている。この意味を来日青年はどれだけ理解してくれただろうか。

プログラムのハイライトであるホームステイは準備の時から細やかな心遣いをし、各家庭は真心を込めて受け入れてくれた。鎌倉ではホストファミリーに慣れている家庭が多く、より深い触れ合いを期待して、今後も交流が続くことを願っている家庭が多い。

鎌倉ユネスコ協会の青年会員によるフェアウェルパーティーはよく準備され内容は濃く、陽気なラテン系の青年に大好評だった。“きもの”を全員が各国流に着こなしていたのが微笑ましく、思わず「お土産にどうぞ」と言ってしまった。

ラテンの風に吹かれて

沢田　亜希子
((社)青年海外協力協会：中南米混成(西語)、社会福祉グループ)

今回、中南米混成（西語）社会福祉グループの招へい事業にプログラムコーディネーターとして参加させていただいた。このプログラムを通じ、日本の福祉制度のあり方、中南米社会の今後の福祉のあり方について考えさせられた。

合宿セミナーでは交流意欲の高い日本と中南米の青年の、相手のことを理解しようというモチベーションの高さに驚かされたと同時に、民間レベルで友好が深まっていくのを目の当たりにして、未来への希望を感じた。

今後、日本・中南米間の国交を深めるために、草の根レベルでの人間同士の交流が心の根本の理解を生み出し、その友好が大きく成長することで未来の日本と中南米の懸け橋の土台になっていくのだと実感した。人に対する興味から人に対する理解、そして歩みよりの過程を経て一歩一歩距離を近づけていくのだということを、身をもって感じた実り多い１カ月だった。

校長先生の言葉

高山　幸人
（青森県青年海外協力協会：中南米混成(西語)、社会福祉グループ）

様々な職種の青年がいる中で、プログラムの焦点を障害児（者）に絞った。

「一人の赤ちゃんが障害を持って生まれた場合を想定して、どういう制度・施設とかかわりを持って自立した人生を過ごしていけるか」

青森第一養護学校施設訪問の最後に校長先生がおっしゃった。

「この学校には言葉で意思を伝えられない子供もいる。その子供たちから教えられたことがあります。コミュニケーションというのは言葉をやりとりするだけではないんだよ。心と心が通うことなんだよということです。心と心が通じれば世界はきっと平和になります。私たちも心と心を通わせて世界の平和のために頑張りましょう」

校長先生の熱い思いが青年たちにも伝わり、皆一様に頬を涙で濡らしていた。施設見学では最高の感動的なシーンだった。

平和を考えるプログラムとして

佐藤　雅一
((財)北海道YMCA：中央アジア混成、経済１グループ)

９月11日の同時多発テロ、その後のアフガニスタン空爆が続く中、今年は来日できるだろうか。

そんな思いが私たちだけでなく、毎年青年のホームステイを受け入れている家庭からも聞かれた。

大阪の開講式で彼らに会った時、平和があってこそこのプログラムが実施できることを強く感じ、正しい相互理解と友好関係、そして平和があってこそ経済の発展も可能になる。その礎を作るプログラムにしていきたいと青年たちに伝えた。

今年から地方一貫型となり、日程も延び内容も充実した中で、何とか「平和」について考えることのできるプログラムにしたい、それも中央アジアの青年だけではなく、日本人の私たち自身もともに考えていこう、と思ったのだ。

「平和」という漠然としたものをより具体化するために、多くの日本人と出会い、飾らない素の日本人と接してもらう。そして互いに人間として理解する時間を多く持つことを心がけた。

青年たちの意欲的に学ぼうとする姿勢と研修先の熱心な説明や心温まる受け入れにいつも時間をオーバーするほどの質問が続き、最後にはメールアドレスを交換し今後の交流を約束するほどだった。

日本青年たちとの合宿セミナーやホームステイプログラムでは日本人を理解するにとどまらず、良き友人、第２の家族を見いだした。それは日本人側も同じで、遠い道の国々であった中央アジアが身近に感じられ、大切な友人・家族の住む国となったのだ。親しい友人・家族がいるからこそ尊敬し、愛し、大切にできる。国と国との間の問題も憎しみと争いではなく、寛容な心で対話を持ってともに生かされる方法で解決する。人と人の絆が平和への礎になると教えてくれた。

広島では、広島平和記念資料館、平和記念公園を見学した。情報としては広島に原爆が落とされたことを知ってはいても、資料館でその実情に触れ、展示物を見つめる青年たちの顔つきが、これまでに見せたことのない厳しい表情に変わっていた。

評価会では、「原爆の悲惨さ、戦争の恐ろしさを肌で感じた広島でのプログラムなしに日本を語ることはできない」「悲惨な状況から復興を成し遂げ、活気と緑、そして人情あふれる素敵な広島の街を作った人々に深い感銘を受けた」と青年たちは語った。

これから自らの国家づくりに取り組む青年たちにとって広島は模範となる都市であり、すべての基本に平和の理念がなければならないことを実感として学ぶことができた。

世界で唯一の原爆の被害を受けた日本の世界に対する役割は、国内外の一人でも多くの青年たちに広島を体験することにより、平和の尊さを知ってもらうことだと思う。来年度から、広島旅行がなくなるが、この事業にかかわる者として、何とか広島を体験させなければならないと考えている。

北海道YMCAは、これまでの経験と北海道を訪れてくれた青年たちと築いた友好関係を次の青年たちに引き継ぎ、輪を広げ、発展させていきたいと考えている。

魅力的な青年たちとの国際交流

宮田　幸昌
（北見国際技術協力推進会議：中央アジア混成、経済２グループ）

かつては世界一のハッカ生産で、今日では日本一のタマネギ産地として知られる北国の小都市・北見で、産・学・官が連携しながら地域産業の振興と活性化に努めている様子を伝え、地方の小さな頑張りが日本経済の発展を支えていることを分かってもらえればと思い、中央アジアの青年たちを迎えた。５カ国27人、行政官や民間経済人がいて経済という幅広い分野なので、各人の興味と関心の度合いも違ったと思うし、知りたいこと学びたいことのズレが多少あったのではないかと思う。

ホストファミリーを中心としたお別れ会での青年たちの明るく元気な姿を見て、厳寒の地で心温かくたくましく生きている人々の様子を理解してくれたのではないかと思った。

プログラムを通じて思うこと

松田　千加子
（(財)大阪ユースホステル協会：コーカサス混成、経済１グループ）

今回は来日青年と日本側に加え、コーカサス３カ国の青年同士の交流も図ることができたように思う。日本を含む参加国にとって、大変有意義なプログラムだったと思うが、国際理解教育等でよく言われる「３F」（フード、ファッション、フェスティバル）にとどまらないよう、いかに今後につなげていくかが重要な課題だと思う。草の根の国際交流としては、媒体語は不要かもしれないが、未来につながる交流をもつには参加国に共通の言語能力が必要になってくるのではないだろうか。

最後に、本プログラムを通じ、大変貴重な経験をさせていただいたことを心よりお礼申し上げます。

青年招へい事業—アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国、サウディ・アラビア— [交流レポート] (2001)
平成14年3月31日
発行　国際協力事業団国内事業部研修業務課
〒151-8558　東京都渋谷区代々木2丁目1-1
新宿マインズタワー
電話　(03)5352-5401～3
編集　(財)日本国際協力センター国際交流部
〒163-0489　東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル
電話　(03)5322-2571

無断転載を禁じます。

JICA
Japan
International
Cooperation
Agency
国際協力事業団